

都市計画道路知久町中村線建設に係
る埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

田井座遺跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯田市教育委員会

都市計画道路知久町中村線建設に係
る埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

田 井 座 遺 跡

1988. 3

飯田市建設部都市計画課
飯田市教育委員会

序

中央自動車道の開通により伊那谷も高速交通の時代を迎え、物流・人的交流が著しく増大しつつある。これに伴ない、飯田市街地における交通渋滞は一般国道153号を中心年々激しくなってきており、その緩和が懸案事項となっている。このため、現在建設中の一般国道153号飯田バイパスと交差し、市街地と伊賀良・山本方面を結ぶ基幹道路の早期実現が求められてきた。

一方、歴史的にみると、飯田市鼎一色地区は隣接する伊賀良地区とともに、先史時代の遺跡に恵まれ、古代交通の要衝として、また中世においては伊賀良庄の一部として、先人の足跡が積み重ねられてきたところである。本書に関わる田井座遺跡もこうした証の一つで、先年調査された殿原遺跡などとともに縄文・弥生時代の集落遺跡としてその文化的学術的価値は高いといえる。

このような文化遺産を継承保存していくことは、私たちの責務であるが、都市計画道路知久町中村線建設が上述の社会的要請を実現する上で不可欠であることから、関係機関が諸協議を重ねた結果、止むを得ず発掘調査を実施し記録保存をはかる仕儀となった。調査の結果は本書に記したとおりであるが、今後の研究に供されてこそ、今回の調査が活かされるわけであり、この十分な活用を祈念するものである。

調査実施にあたり、その趣旨に深い理解を示し、ご協力いただいた飯田市役所建設部都市計画課、ならびに秋の長雨や吹きすさぶ寒風の中で調査に従事いただいた作業員の皆様他関係各位に感謝申し述べ、刊行の辞とする次第である。

昭和63年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　　言

1. 本書は、都市計画道路知久町中村線建設に伴なう飯田市鼎一色地籍所在「田井座遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市建設部都市計画課からの委託を受け飯田市教育委員会が実施した。
3. 本遺跡の略号は、TIZとし、発掘作業から整理まで一貫して使用した。
4. 本書の記載については住居址を優先し時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に統一した。
5. 本書は佐々木嘉和・吉川豊・馬場保之が分担執筆し文末に執筆者名を付した。なお原稿の一部につき小林正春が加筆訂正を行なった。
6. 本書に掲載した図面の整理・遺物実測は佐々木・馬場が行なった。なお整理作業実施にあたり、佐合英治・吉川が補佐した。
7. 石器実測図について、実線－磨滅痕・砥面の範囲、矢印付実線－研磨痕・研磨面の範囲、破線－敲打痕・潰しの範囲、網掛け部分－ロー状光沢物付着部分を使用した。
8. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表わしている。
9. 本書の編集は、調査員全体の協議をふまえ、佐々木・馬場が行ない、小林が総括した。
10. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序

例 言

I 調査の経過	1	
1 調査に至るまでの経過	1	
2 調査の経過	1	
3 調査組織	2	
(1) 調査団	2	
(2) 事務局	2	
II 遺跡の環境	3	
1 自然環境	3	
2 歴史環境	3	
III 調査結果	9	
1 竪穴住居址	9	
1) 繩文時代	9	
(1) 4号住居址	(2) 5号住居址	(3) 6号住居址
(4) 7号住居址	(5) 8号住居址	
2) 弥生時代	13	
(1) 1号住居址	(2) 2号住居址	(3) 3号住居址
2 方形周溝墓	16	
(1) 方形周溝墓 1	(2) 方形周溝墓 2	
3 土 坑	18	
(1) 土坑 1		
4 柱穴群	19	
(1) A区	(2) B区	
5 その他	26	
IV まとめ	27	

挿 図 目 次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2	調査位置及び周辺地図	5
挿図 3	TIZ 調査区全体図	7
挿図 4	TIZ 4号住居址	9
挿図 5	TIZ 5号住居址	10
挿図 6	TIZ 6号住居址	11
挿図 7	TIZ 7号住居址	12
挿図 8	TIZ 8号住居址	13
挿図 9	TIZ 1号住居址	14
挿図10	TIZ 2号住居址	15
挿図11	TIZ 3号住居址	16
挿図12	TIZ 方形周溝墓1	17
挿図13	TIZ 方形周溝墓2	18
挿図14	TIZ ピット平面図(1)	20
挿図15	TIZ ピット平面図(2) 土坑1	21
挿図16	TIZ ピット平面図(3)	22
挿図17	TIZ ピット平面図(4)	23
挿図18	TIZ ピット平面図(5)	24
挿図19	TIZ ピット平面図(6)	25

図 版 目 次

第1図	TIZ	4・5・7号住居址出土遺物	30
第2図	TIZ	1号住居址出土遺物	31
第3図	TIZ	1号住居址出土遺物	32
第4図	TIZ	1号住居址出土遺物	33
第5図	TIZ	2号住居址出土遺物	34
第6図	TIZ	3号住居址出土遺物	35
第7図	TIZ	3号住居址、方形周溝墓1・2、焼土、遺構外出土遺物	36
第8図	TIZ	4・5・8・3号住居址、土坑1出土石器	37

写 真 図 版 目 次

- 図版1 田井座遺跡近景
- 図版2 遺構分布状況
- 図版3 4号住居址・炉
- 図版4 4号住居址断面・遺物出土状況
- 図版5 5号住居址・遺物出土状況
- 図版6 6号住居址・7号住居址
- 図版7 7号住居址遺物出土状況・8号住居址
- 図版8 1号住居址・遺物・炭化材出土状況
- 図版9 1号住居址炉1・断面、炉2
- 図版10 1号住居址遺物出土状況
- 図版11 2号住居址・遺物出土状況
- 図版12 2号住居址炉・断面
- 図版13 3号住居址炉・断面
- 図版14 方形周溝墓1・主体部1
- 図版15 方形周溝墓1・主体部2・方形周溝墓2
- 図版16 土坑1・断面
- 図版17 A区・柱穴群
- 図版18 A区・B区柱穴群
- 図版19 4号住居址出土遺物
- 図版20 5号・7号住居址出土遺物
- 図版21 1号住居址出土遺物
- 図版22 1号住居跡出土遺物
- 図版23 1号住居址出土遺物
- 図版24 2号住居址出土遺物
- 図版25 3号住居址出土遺物
- 図版26 3号住居址・方形周溝墓1出土遺物
- 図版27 方形周溝墓2・A区焼土遺構・遺構外出土遺物
- 図版28 調査風景
- 図版29 調査風景

I 調査の経過

1. 調査に至るまでの経過

市道知久町中村線は、飯田市の中心地から国道153号線飯田バイパスと交差し、伊賀良(中村)方面へ向かう基幹道路として計画されたものである。その工事も最終段階を迎え、残すは鼎一色地区だけとなった昭和62年9月に飯田市建設部都市計画課から教育委員会社会教育課へ、埋蔵文化財包蔵地田井座遺跡の保護について協議があった。

昭和61年度には、田井座遺跡の北東に位置する一色遺跡について同様の協議がなされ、現地協議、試掘を行なった。その結果遺物・遺構が認められなかったため、遺跡外とした経過がある。

そこで社会教育課は長野県教育委員会文化課の立会いを求め、現地において協議を実施した。その結果、建設予定地内の試掘を行ない再度協議することを決めた。

早速社会教育課では、計画部分の365mに試掘グリッドを設定し、試掘調査を開始した結果、気賀沢川より120mまでに遺構・遺物の存在が確認されたため、その範囲1,440m²の発掘調査を実施した。

(吉川 豊)

2. 調査の経過

関係機関の協議・調整を経て、昭和62年9月28日現地作業に着手した。その実施にあたり、No.80杭以南をA区、以北をB・C区、センター杭を49、50列の境とした。まずA区No.81~83杭間に重機を入れ、耕土を除去した後、手作業で遺構検出につとめた。この結果、弥生時代後期初頭の竪穴住居址2軒、溝址、土坑各1その他ピット群が確認され、掘り下げた後写真撮影・測量調査を行なった。

10月16日より、B・C区No.76~78杭間、A区残り部分及びB区残り部分について順次重機により耕土を除去し、遺構の検出作業を行なった。No.76~78杭間では耕作による擾乱が地山上面まで達しており、縄文時代中期の土器片等少量の遺物が出土したにとどまる。No.80・81杭間で、弥生時代後期初頭の竪穴住居址1軒と小穴群が、またB区では縄文時代前期初頭の竪穴住居址5軒、弥生時代後期の方形周溝墓2基等が検出された。これらについて順次掘り下げをした後、写真撮影・測量調査を実施し、11月7日現地作業を終了した。なお、調査期間中にあって、台風の接近等による中断や、作業員の確保が十分行なえなかつたなど調査は困難を極めた。

引き続いて飯田市考古資料館において、遺物の水洗・注記・接合・復元作業及び実測図の作成、現地で記録された写真・図面について整理作業を行ない、昭和63年3月末まで報告書作成作業に

あたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之

作業員 木下当一 細田七郎 高橋収二郎 松下直市 木下傳 木下和子 大島利男

池戸宰子 清水巽 松下ノブ子 溝上清見 伊藤いちゑ 池田幸子

唐沢古千代 川上みはる 木下玲子 櫻原勝子 小平不二子 武田恵美

丹羽由美 牧内八代 松本恭子 宮内真理子 吉川悦子 吉川紀美子

吉沢佐紀子 大日方富士子 正木実重子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

塙沢正司 (社会教育課長)

池田明人 (社会教育課文化係)

小林正春 (〃 文化係)

吉川豊 (〃 同 〃)

馬場保之 (〃 同 〃)

土屋敏美 (庶務課)

(馬場保之)

II 遺跡の環境

1. 自然環境

田井座遺跡は飯田市鼎一色地区に所在する。

鼎地区は昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。合併前の下伊那郡鼎町は周囲を飯田市に囲まれた下伊那郡の飛地であった。鼎地区は飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、東南側は松尾地区と下伊那郡上郷町に接する。地形を概観すると標高500m前後に伊賀良地区を形成する発達した扇状地形の末端部（扇端）があり、それより以東が鼎地区となる。鼎地区全体としては微地形による変化はあるが、段丘地形上に立地し、基本的には3つの段丘面により構成される。段丘の方向はいずれも飯田松川に平行している。

田井座遺跡の立地する一色地区は、鼎地区的最上位段丘上にあり、飯田市伊賀良北方地区と接している。中央アルプスの笠松山麓から発達した扇状地が終息し、段丘地形を示す付近で、天竜川の小支流気賀沢川による浸蝕谷が始まり、飯田松川に面した断丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地基部付近が一色地区でその東方は名古熊地区となる。標高は500m前後で形成され始めた舌状台地の巾は約300mである。台地の中央部が緩方向にやや凹み湿地を成している。両側の断丘崖に近い部分約100mずつが乾燥した台地で、中央の約100mが湿地である。

田井座遺跡は一色地区の西隅に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地の続きであり、伊賀良西の原地区に接する。南西側は気賀沢川に面する台地の縁部が端で、東南側は鼎名古熊地区に接する。北東側は湿地を挟んで一色遺跡である。気賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間がやや小高い台地で、中央から北東と南西に緩く傾斜している。南西向の緩斜面は水田の造成により削平埋立てがあり、ローム面まで削平が及んでいた。北東側の緩斜面は果樹園で深耕はあったが削平ではなく、地表から100~50cmでローム面であった。検出調査した遺構はローム面に掘り込まれている。

以上記したように遺跡は台地端に位置し、乾燥した場所であるがすぐ近くに湿地があり、生活・生産に適した場所と言える。

2. 歴史環境

鼎地区的遺物散布地・遺跡を概観すると、飯田松川の氾濫原・段丘崖・台地中央を除いた場所に位置しており、32遺跡（注1）と14基（注2）の古墳が知られている。



挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

調査がなされた遺跡は、代田（注3）・山岸（注4）・天伯B（注5）・天伯A（注6）・猿小場（注7）・矢高原・八幡原（注8）・黒河内（注9）・一色・天伯B（注10）の各遺跡である。

縄文時代から中世までの各期の資料が得られており、特に天伯A・B遺跡は縄文時代から古墳時代に至る遺構が見られ、弥生時代と古墳時代を中心で大集落の様相を呈しており、天伯B遺跡の古墳時代祭祀址は特筆されるものである。

鼎地区内の古墳は14基（注2）を数えるが、現存するものは半数である。古墳のほとんどは段丘・台地端に構築されており、田井座遺跡の北東方向200mの台地端に西の原・宮の原古墳2基の記録がある。

平安時代は猿小場遺跡で25軒の住居址が調査されているが、乾燥した段丘上であり生産活動を何に求めたか注目される遺跡である。

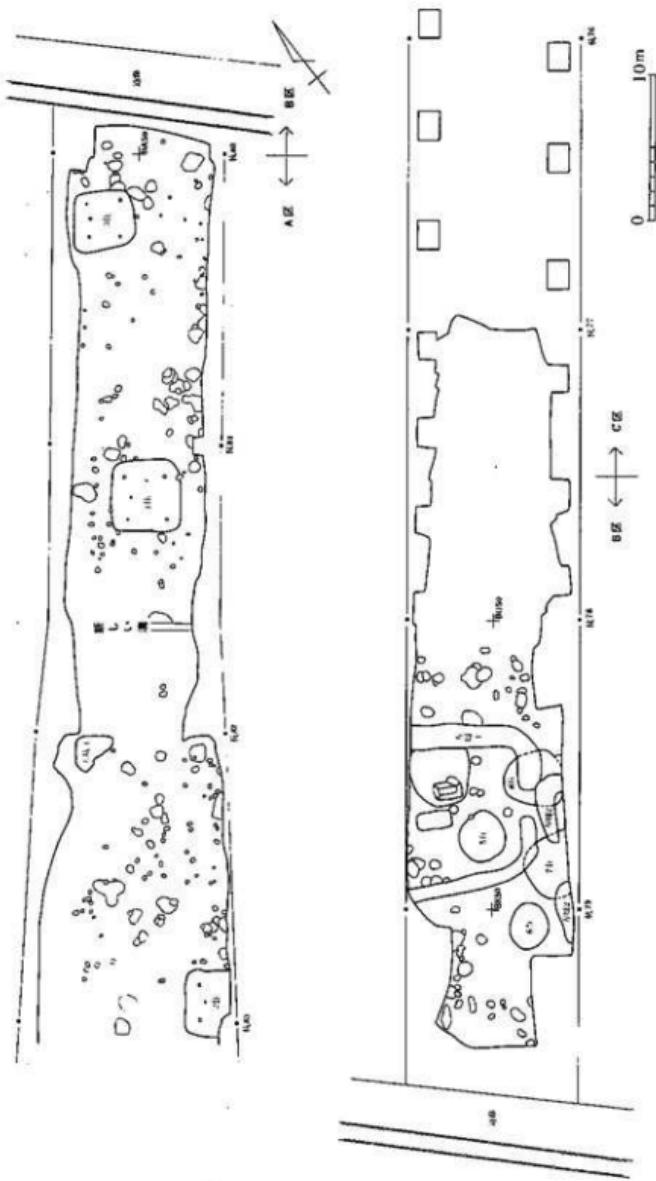
中世に入って鼎に関連する記録はないが、伊賀良庄に含まれていたものと思われる。室町時代に小笠原氏の居住した松尾城は、鼎地区内と言って良い程に近く、当然地頭小笠原氏繁栄の基盤であった事は疑う余地が無い。

以上鼎地区を概観したが、総体的にみれば原始より連続と続く栄えた地と言うことができる。

（佐々木嘉和）

註

- 長野県県史刊行会 1981『考古資料編 一 遺跡地名表』 長野県教育委員会
- 鼎町史編纂委員会 1986『鼎町史』 飯田市鼎公民館
- 伴信夫・塩沢仁治 1969『長野県下伊那郡鼎町代田遺跡・同松川町庚申遺跡調査概報』『信濃』2巻2号
- 中央道遺跡調査会 1971『中央道調査報告 一 飯田地区』 長野県教育委員会
- 中央道遺跡調査会 1975『中央道調査報告 一 下伊那郡鼎町（その2）』 長野県教育委員会
- 鼎町教育委員会 1975『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』
- 佐藤魁信 1980『猿小場遺跡』 飯田市教育委員会
- 追那藤麻呂 1983『矢高原・八幡原遺跡』 鼎町教育委員会
- 追那藤麻呂 1984『鼎町黒河内遺跡』 鼎町教育委員会
- 追那藤麻呂 1984『鼎町一色・天伯B遺跡』 鼎町教育委員会



挿図3 TIZ 調査区全体図

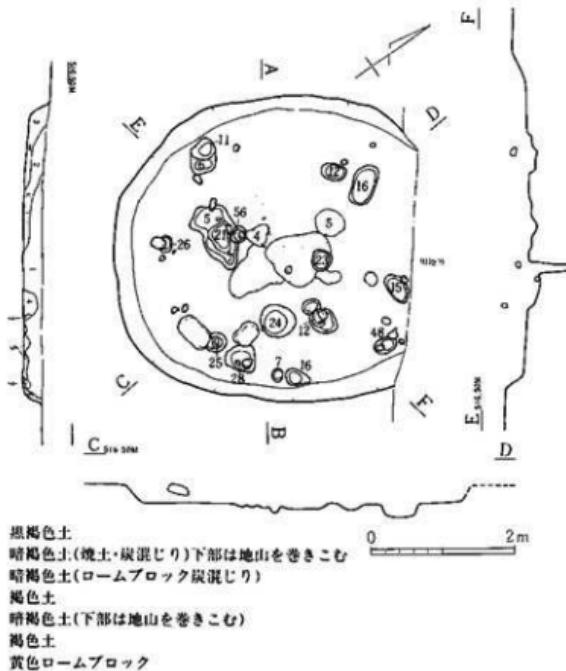
III 調査結果

1. 壁穴住居址

1) 縄文時代

(1) 4号住居址（挿図4）

BO48を中心とし、方形周溝墓1の周溝及び主体部2に区切られて確認された。4.7×4.6mの不整円形を呈する壁穴住居址であるが、炉は住居址のはば中央部に設けられていたようで柱穴・入口部も把握できなかったため、主軸方向は不明である。床面はやや軟らかく、壁高は17~27cmを測り、壁面は緩やかな立上がりを示す。周溝は検出されなかった。本住居址には16個の穴が付属するが、規模・深さとも描わず、柱穴を特定することは困難である。しかし、壁際の穴のうち6

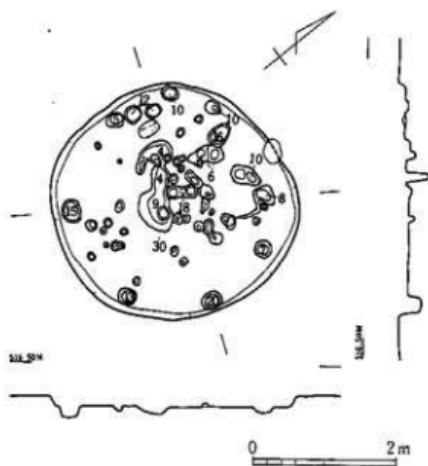


挿図4 TIZ 4号住居址

~8個が壁支柱に相当すると考えられる。中央付近に焼土・炭がやや広い範囲に薄く分布しており、その南東脇の凹んだ部分が地床炉として機能した可能性がある。覆土は上から黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土の順で堆積しており、覆土中より土器片・石鎌・剝片・黒曜石微小剥片等が出土しているが、床面直上の遺物は少ない。南東壁寄りに台石として使用されたと考えられるやや大きい石があった。

遺物は尖底を含む深鉢形土器の他、石鎌・ビエス＝エスキュー・打製石斧等が出土している。土器は細線文施文土器が主体を占め（第1図1~8）、頸部の隆帯ないし稜帯上に刺突が施され（2~5）、胸部上半に細線文が施文されている。また内面には指頭痕が顕著に残され、ごく薄手の繊維を含まない土器である。4を除く他の土器は暗褐色ないし黒褐色を呈し、4は焼き上がりの悪い内外面とも黄褐色を呈する東海系の土器である。9の羽状縞文施文土器は非結束のL R・RL 2種の原体を横位に回転したものである。10は無文の尖底部で外面胴部に指頭痕があるが上半は細線文が施文されるものと思われる。11の打製石斧は緑色岩製で粗い剥離の身のやや分厚いものである。石鎌は大半が黒曜石製で他にチャート製（第8図9）や表面の珪化したものがある（同1~4）。

出土遺物等から縄文時代前期初頭に比定される。



挿図5 TIZ 5号住居址

(2) 5号住居址 (挿図5)

B M49を中心として、方形周溝墓1と重複し、4号住居址の南側で検出された。規模 3.4×3.2 mの不整円形を呈するが、4号住居址と同様、主軸方向は不明である。床面は凹凸があり、やや軟らかい。検出面からの壁高は10~16cmを測り、やや急に立ち上がっている。本住居址に付属する穴は20個ほどあり、このうち壁際の6~8個が壁支柱にあたると思われる。いずれも平面形は径20~25cm程度の不整円形ではあるが、深さは揃っていない。壁際には垂木尻と思われる小穴がいくつか確認された。住居址の中央部の穴付近に焼土が認

められ、地床炉であると思われる。

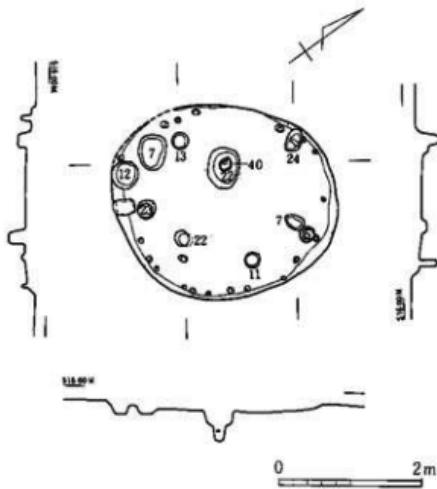
本住居址中央覆土中より石匙が出土した他、4号住居址と同様、石錐・多数の黒曜石微小剝片等が出土した。土器はいずれも細片で細線文施文のものが多い(第1図12~19)。13は口唇部に刻みが施され、14~16は頸部に刻み、押圧の施された隆帯が巡る。12・14・15・17・19は内面に顯著な指痕を残す。石匙は緑色岩製で、肩部に打面を残した粗雑な剥離の厚手のものである(第8図13)。

出土遺物等から縄文時代前期初頭に比定される。

(3) 6号住居址(挿図6)

BJ51を中心方に方形周溝墓1・2と隣接して、5号住居址の南側に確認された。3.1×2.7mの不整規円形を呈する小規模な竪穴住居址で、主軸方向はN48°Wを示す。床面はやや堅く、中央部が低く凹む。壁高は検出面から6~11cmを測り、全体的にやや急な立ち上がりを示す壁面が検出された。本住居址に伴う穴は10基あり、深さに疑問が残り確定できなかったものの6基程度の壁支柱であると考えられる。また壁下に確認された19個の小穴は2~3本一組となるようで、とくに北西辺の3本二対の小穴は入口施設を構成すると思われる。これ以外の小穴は垂木尻であろう。中央入口寄りには55×45cmの二重構造の炉址があり、覆土に焼土が含まれていた。

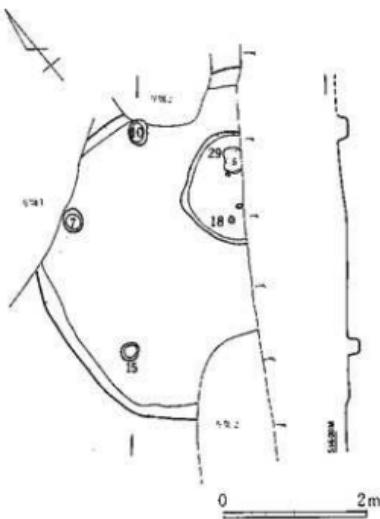
出土遺物は少なく、黒曜石細片の他いずれも細かい土器片で、図示及び所属時期の判別は困難であるが、他の住居址と同様縄文時代前期初頭と考えられる。



(4) 7号住居址(挿図7)

BL52を中心に方形周溝墓1・2に切られて検出された。住居址の東側半分は調査区外にかかり未調査のため規模・プラン・主軸方向とも不明である。壁と床面との境はだらだ

挿図6 TJZ 6号住居址



挿図7 TIZ 7号住居址

出土遺物等から縄文時代前期初頭に比定される。

らと不明瞭で、また床面は全体的に軟らかい。壁際に掘り込まれた穴は、径20~30cmの不整円形で深さが揃わぬものであるが、壁支柱であると考えられる。壁支柱は未調査分を考慮すると6~8本であろう。他の住居址と異なり、北西壁際と北壁寄りの穴の2ヶ所に焼土があり、特に後者は厚い焼土が発達しており、地床炉であろう。北壁寄りの穴から器形の知れる深鉢形土器が出土したほか、遺物は少ない。方形周溝墓1の周溝から石鏃が2点出土しているが、本来この住居址に伴うものと思われる。

出土土器としては先述の深鉢形土器があげられる。(第1図20)。尖底部を欠くものの、器形の概要は知れる。口唇部及び外面頸部隆帯上に刺突が施され、数条の細線文が格子状に施文される。また21・22も細線文が施文される。

(5) 8号住居址（挿図8）

B050を中心に行方周溝墓1・2の周溝に切られて検出された。規模4.3×3.9mの不整梢円形を呈する堅穴住居址であるが、主軸方向は不明である。床面はほぼ平坦であるが軟らかく、壁は緩やかに立ち上がっている。柱穴の詳細は不明であるが、壁際の2つの穴が他の住居址例から壁支柱の可能性がある。方形周溝墓1の周溝に切われていることもあって焼土は発見されず、炉址の位置を特定することはできなかった。

本住居址からは石鏃1点(第8図17)が出土した他遺物は少なく、所属時期は不明であるが、他の住居址と同様、縄文時代前期初頭に位置づけられよう。

(馬場保之)

2) 弥生時代

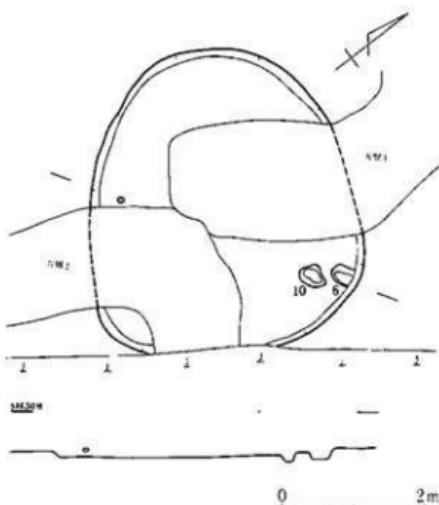
(1) 1号住居址（挿図9）

A区のほぼ中央用地内に検出した。4.9×5.1mで隅丸方形の窪穴住居址であり、主軸は古い土器埋設炉方向でN49°Wを測る。火事の住居址であり、床面密着とわずか浮いた状態の炭化材を多量に検出した。覆土は炭混じりの黒色土一層であった。壁は比較的急に立ちあがり10~30cmの高さである。床面は非常に堅くタタキ状になっていた。主柱穴は4本でいずれも平面形は小さいが深い。炉は2箇所にあり、北西側主柱穴間の土器埋設炉が古く、北東側主柱穴間の地床炉が新しい。埋設炉には要素が埋められており、上面には貼り床

がされていた。壺を埋める掘り方は小さく、壺の入るだけの穴であった。新しい地床炉には炉縁石が設置されるが、ローム面の焼けは無かった。周溝はほぼ半周確認できたが浅い。

遺物は比較的多く、実測可能な固体は中央から南隅4分の1を除く床面から出土した。壺・壺・高环・有肩扁状形石器・砥石などである。床面には花崗岩などの礫が比較的多く、散布していたが、ローム層・覆土共に礫の混入がない場所であり、人為的に持ち込まれたものであるが特に使用痕は認められなかった。壺には波状文・斜走短線文が、壺には波状文・横線文・斜走短線文・円弧文が施される。壺の破片に推定直径50cmを越えるもの（第2図1）がある。高环は環部に稜を持つ。有肩扁状石器（第4図5）にはロー状光沢が残っている。砥石（第4図6~8）は比較的多く出土しており、すべて砂岩系の石であり軟らかい。

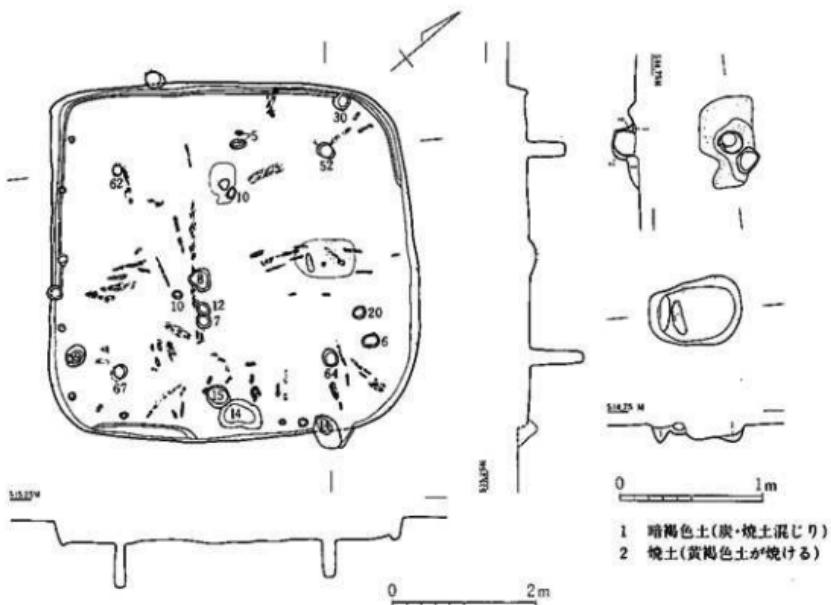
時期は弥生時代後期中島式期の古い段階にあたり恒川V期（注1）である。



挿図8 TIZ 8号住居址

註

1. 山下誠一 1986 「恒川遺跡群 遺物編」 飯田市教育委員会



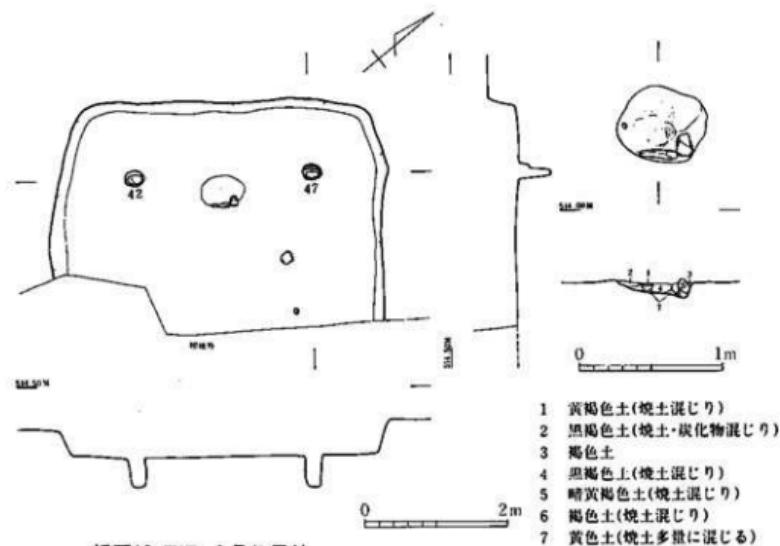
挿図9 TIZ 1号住居址

(2) 2号住居址 (挿図10)

A区南西側の台地端に近い所で検出したが、用地外にかかり半分余の調査である。想定で4.6m前後の隅丸方形竪穴住居址であり、主軸方向はN52°Wを測る。覆土は上層に黒色土・下層に褐色土が入っており、中層は漸移層であった。調査部分の壁高は40cm前後あり、垂直に近く立ち上がっている。床面は該期住居址と比較すれば軟らかく、緩い凹凸があった。主柱穴は2本確認した。平面形はやや小形の長楕円形であり、割り材使用の柱であった可能性も推測できる。深さは40cm強を測る。炉は北西側主柱穴間中央にあり、炉縁石2個を内側に持つ地床炉である。床面から炉底部まで10cm弱であり、浅く著しい焼土は認められなかった。

遺物の出土量は少なく、土器はすべて破片である。実測したものは壺・壺であり、波状文・簾状文・円弧文が施されている。壺の胴部に横ナデ後窓磨きを始めた痕跡の残るもの（第5図1）があり上から下へ磨いている。石器は2点であり、硬砂岩製の打製石斧である。

時期は施文などから、弥生時代後期中島式期の古い段階にあたり、恒川V期である。

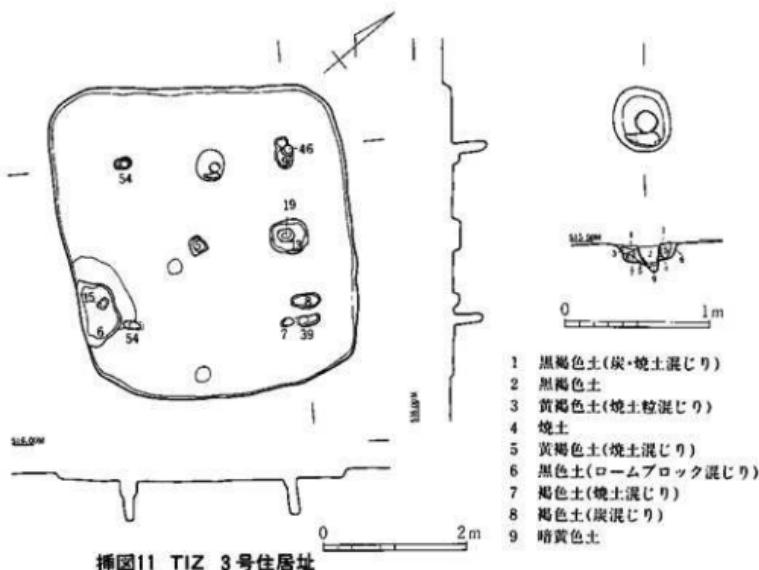


挿図10 TIZ 2号住居址

(3) 3号住居址 (挿図11)

A区北東端近く台地のはば中央に検出した。縄文時代の穴を切っている様子があった。4.3 × 4.1 m の隅丸方形竪穴住居址であり、主軸は土器埋設炉方向で N56°W を測る。火事の住居址であり細かな炭化材が覆土中に混在しており、床面まで黒色土一層であった。水田造成時にローム層まで削平しており、壁の残りは少なく 5~10cm であった。床面は非常に堅くタタキ状になっていた。主柱穴は 4 本で、平面形は小さく長楕円形であり、割り材の柱使用が推測される。深さは 40~50cm である。炉は 2箇所に検出した。北東側主柱穴の炉址上面は、貼り床されており古い。この炉址には焼土の混入した覆土が入っていただけであるが、掘り方の中央部が 5cm 余込み、土器の埋設されていた可能性もある。床面中央部に焼土の散布がみられ、この炉から排出されたものと推測した。北西側主柱穴間に検出した土器埋設炉は、内側に炉緑石を持ち底と口縁を欠いた甕を埋めている。

遺物の出土量は比較的多く、ほぼ完型になるものは床面中央から北西側で、埋設炉の両側から出土した。土器は甕・壺・高坏、石器は有肩扁形石器・打製石斧・紡錘車・縄文時代の混入品である石匙・打製石鎌などである。甕・壺には波状文・斜走短線文・円弧文が施される。高坏は脚部端をわずか欠くがほぼ完型で、坏部に稜が着きそこから口縁まで著しく外反する。有肩扁形石器・打製石斧は硬砂岩製で前者にはロー状光沢が認められる。紡錘車は砂岩製である。



插図11 TIZ 3号住居址

時期は弥生時代後期中島式期の古い段階にあたり、恒川V期である。

(佐々木嘉和)

2. 方形周溝墓

(1) 方形周溝墓 1 (插図12)

B K ~ B Q - 47 ~ 51 で 4 ~ 8 号住居址を切り、方形周溝墓 2 に切られて確認された。西側は調査区分にかかり未調査である。このため、全体を把握していないが、不整圓丸方形を呈すると思われる。南北の規模 11.0m、主軸方向 N61.0°W、周溝の幅 1.0 ~ 1.7 m、深さ 23 ~ 46 cm を測り、東辺のはば中央部に幅 1.9 m の土橋を持つ。周溝内には上部に黒色土、下部に褐色土の堆積が認められ、周溝の北半は内側が一段低くなっている。主体部は 2 基検出され、ほぼ中央部の主体部 1 は 240 × 120 cm、深さ 18 cm、その北東の主体部 2 は 200 × 120 cm、深さ 13 cm である。主体部 1 の覆土は黒褐色土・褐色土、主体部 2 の覆土は黄色土・暗褐色土・褐色土・黒褐色土で、後者は

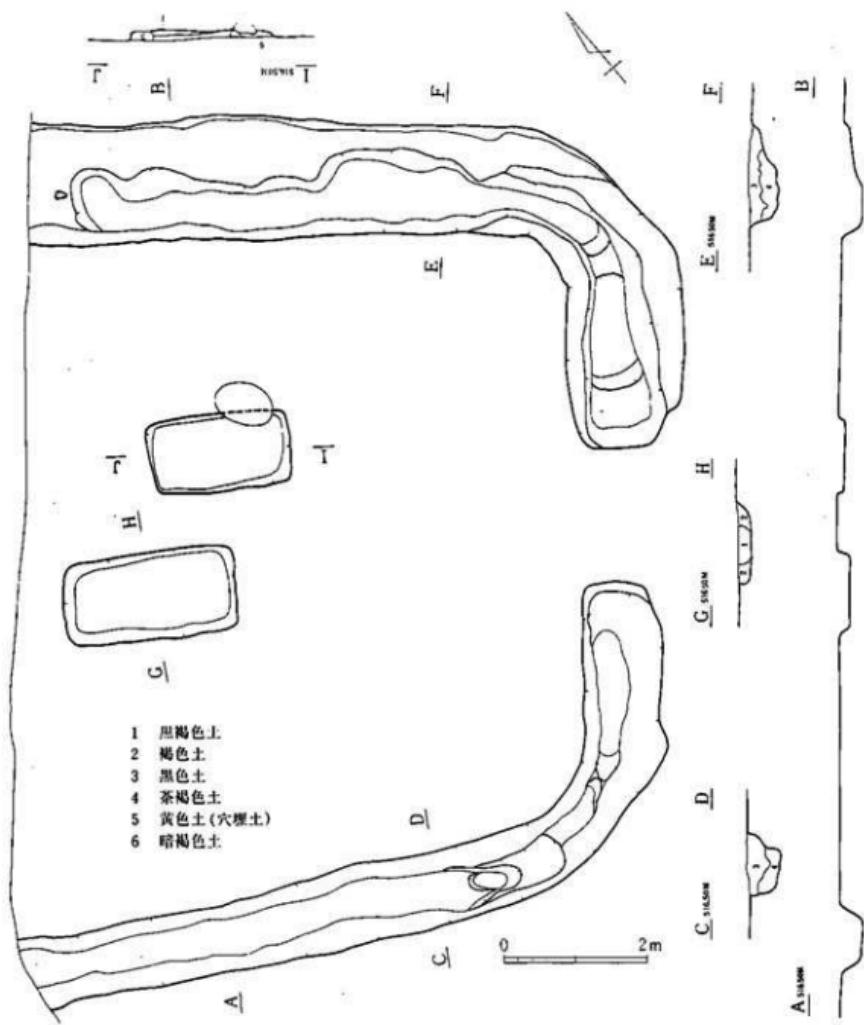


插图12 TIZ 方形周溝墓 1

検出状況、規模等から追葬の可能性もあると考えられる。

主体部から遺物はほとんど出土しておらず、周溝内から弥生時代後期の壺・甕片、打製石斧、縄文時代前期初頭の土器片、黒曜石製石器等が出土しているが、後者は7号住居址と重複した部分からの出土をみており、それに伴うものであろう。

出土遺物等から、弥生時代後期に比定される。

(2) 方形周溝 2 (挿図13)

B I ~ B O - 51・52を中心に、7・8号住居址及び方形周溝墓2を切って確認された。周溝の西辺と北辺の一部を検出したのみで、主体部を含めて大部分が調査区外にある。このため、全体形は不明であるが、ほぼ隅丸方形を呈すると思われる。また規模は南北方向で推定12mを測る。西辺のはば中央部に幅1.25mの土橋をもつ。周溝は幅1.2m前後、深さ46~53cmで断面逆台形を呈する。

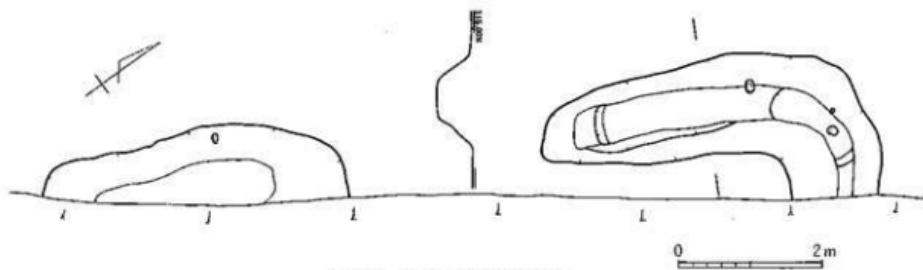
周溝内から弥生土器壺・甕片、打製石斧等が出土しており、弥生時代後期に位置づけられる。

(馬場保之)

3. 土 坑

(1) 土 坑 1 (挿図15)

A区のはば中央北西用地ぎわに検出、土坑にしたが2箇の穴が切り合っていた。規模は2.6×1.5mと1m前後の穴である。長軸方向はN45°Wを測り、平面形は不整橢円である。深さは検



挿図13 TIZ 方形周溝墓2

出面から50cmあり、断面形は段の付く逆台形である。覆土はほぼ3層に分けられ、上層に黒色土・中層に漆黒色土・下層に黄色土主体の土が入っていた。覆土の色から見ると、弥生時代の遺構内に入る土と同色のものであった。覆土の中層に30×20cmの自然縫が入っていたが、性格は不明である。他に遺物の出土はなかった。

時期の決定はできないが、覆土の状態・色は弥生時代の遺構と共通する。

4. 柱穴群

(1) A区(掲図14~17)

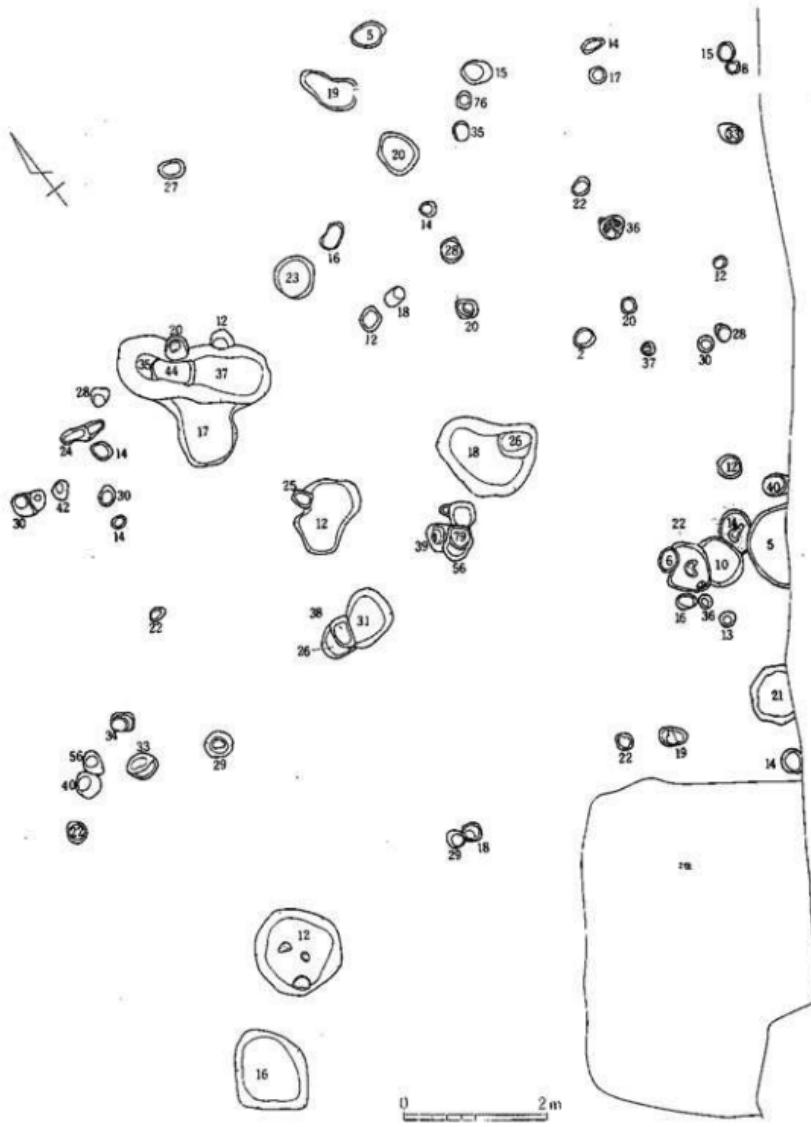
A区の延長は約70mあるが、延長・幅員共に全部調査したのではないが、柱穴群を概観してみる。穴の分布に差が認められるが、極端に少ない中間部分は、田造成時の削平がローム層まで及んでいる為、飛ばされたものであろう。穴の形態・深さ・覆土の色等は様々であり、掘立柱建物址の柱穴になる可能性を感じるものもあったが、配列等から建物としてとらえられるものはない。遺物の出土した穴はわずかであり、縄文時代・弥生時代・中世の小破片である。確實ではないが出土した遺物と穴の関係を次の様にとらえた。縄文時代は褐色土と茶褐色土、弥生時代と中世は黒色土であり遺物の出土したもの以外の細分はできない。台地中央に近い、3号住居址周辺の穴から縄文時代土器片、打製石鎌・黒曜石片が出土し、B区の縄文時代遺構との関連が推測できる。No83中心杭西側の深さ20cmの穴から弥生時代の壺の口縁片が出土したが、2号住居址と関連があるかもしれない。1号住居址と2号住居址間のごく少数の穴から中世陶器片が出土している。

(佐々木嘉和)

(2) B区(掲図18・19)

B区で検出された柱穴群は、覆土・新旧関係・遺物等から縄文時代前期初頭のものと考えられ、該期の竪穴住居址群の両側に弧状の密集した部分がある。調査区が幅12mの限定された範囲であり、即断はできかねるが、A区の3号住居址付近にも該期の柱穴群が検出されたことから弧状ないし環状に分布する竪穴住居址群の内帶及び外帶を構成する可能性もある。

(馬場保之)



挿図14 TIZ A区柱穴群 1

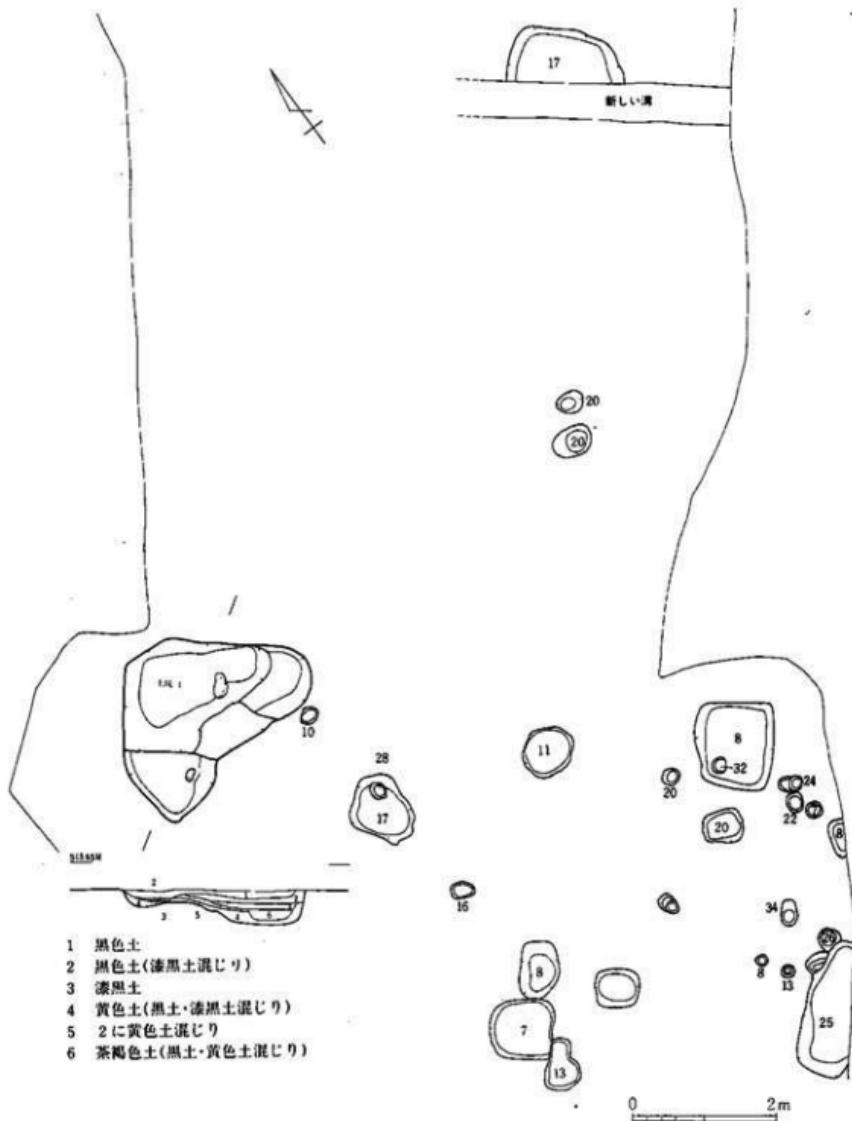
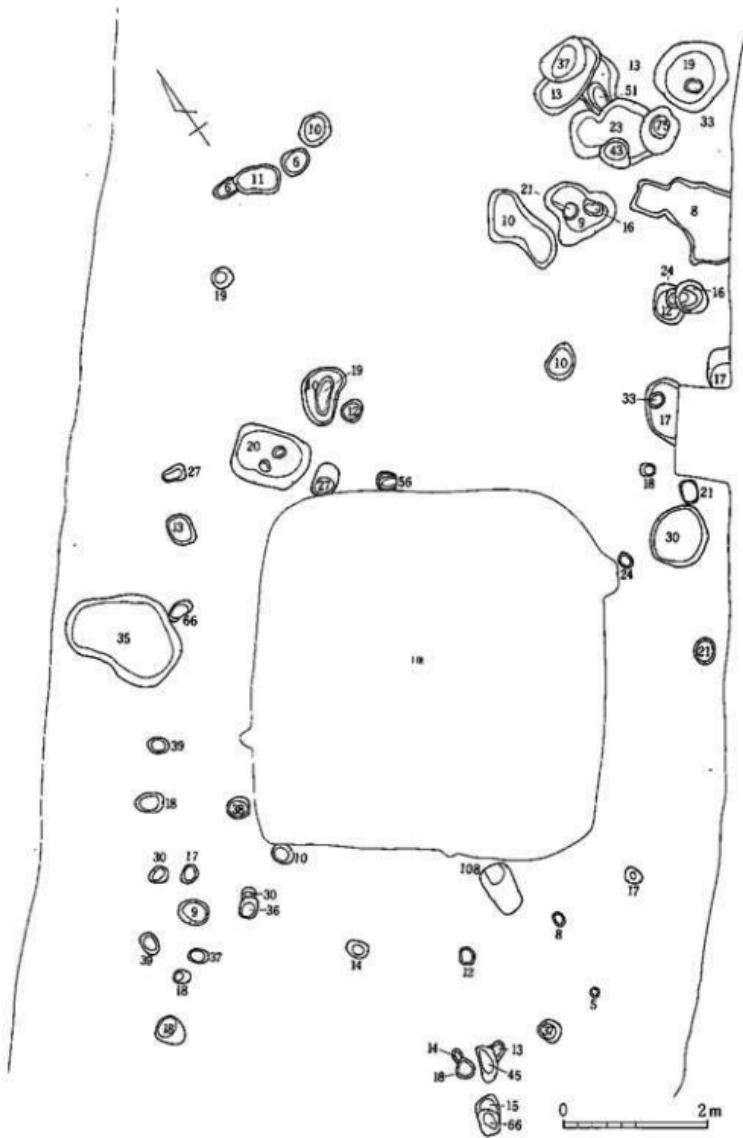
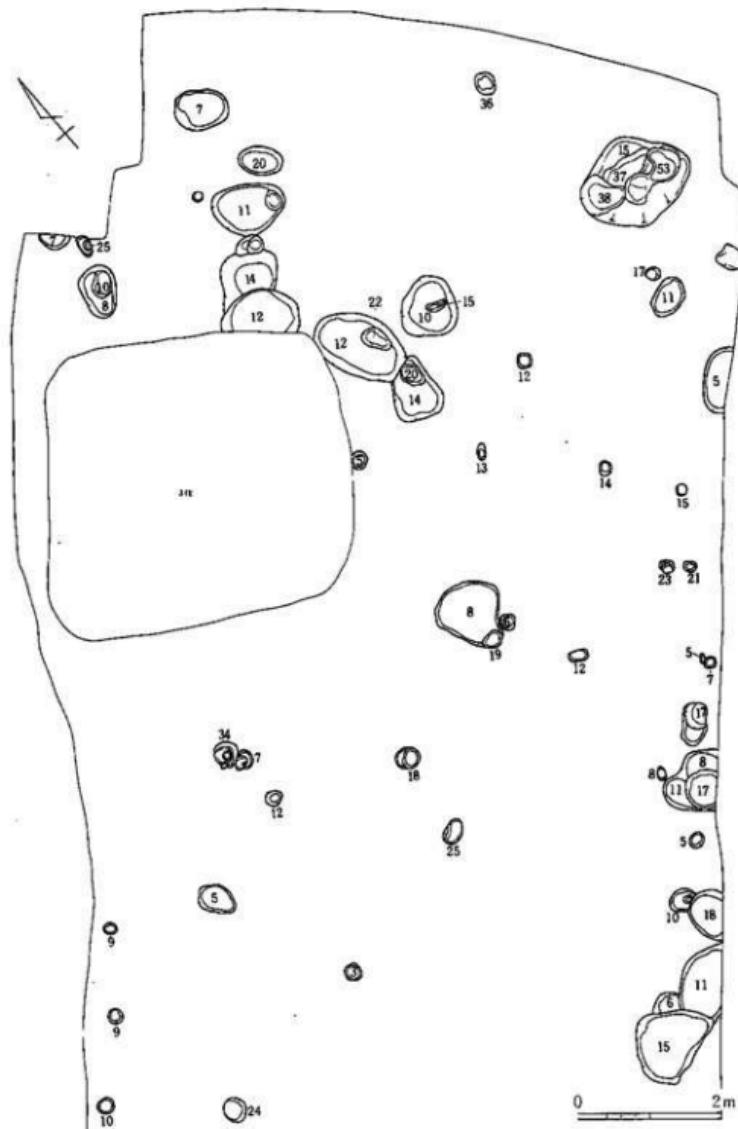
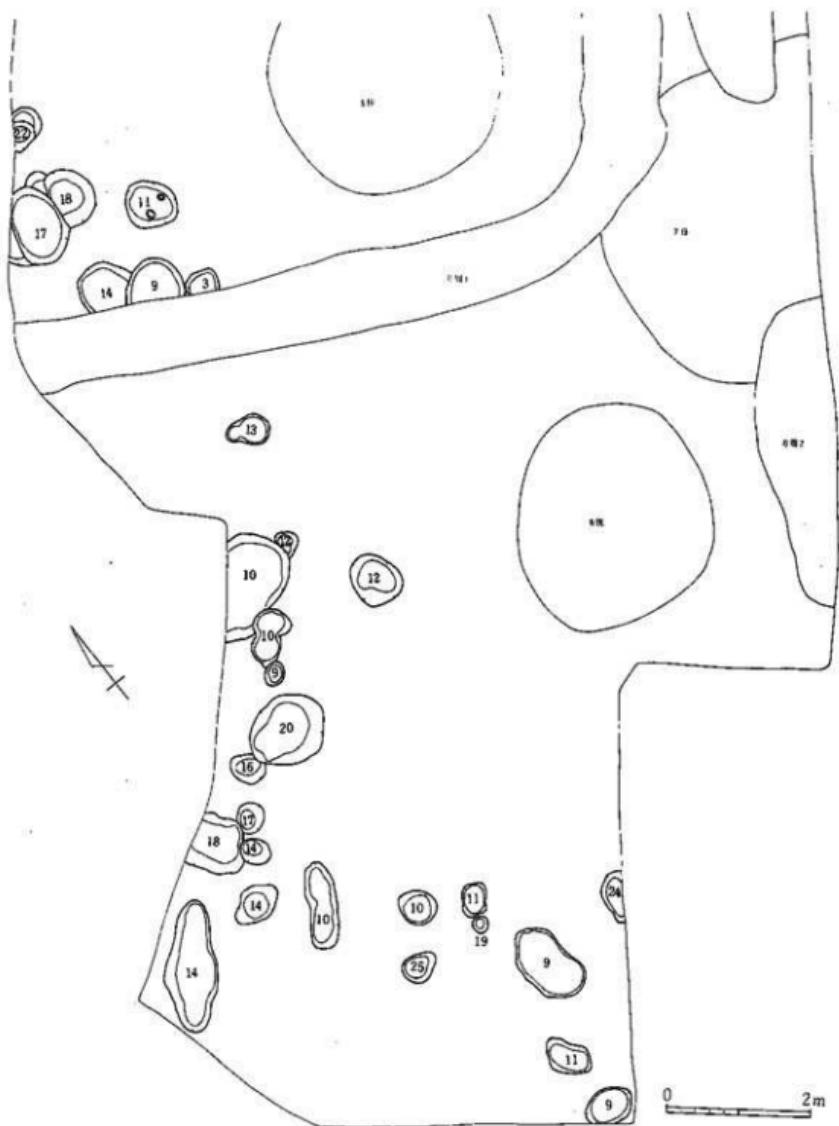


插圖15 T1Z 土坑1・A区柱穴群2

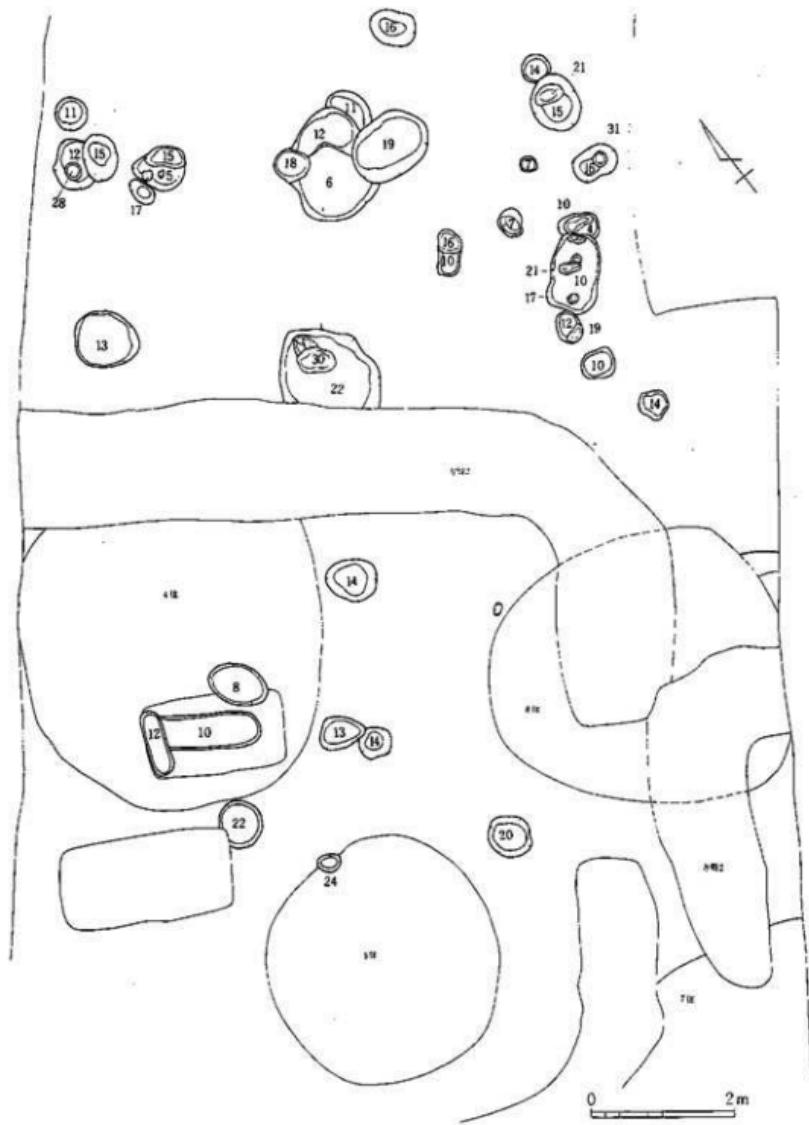




插図17 TIZ A区柱穴群4



擇図18 TIZ B区柱穴群1



挿図19 TIZ B区柱穴群 2

5. その 他

発掘調査した遺構中には、項を立てないものがあり、その他として概略を記す。

焼土（補図14）は2号住居址の北東側3.5mに検出した。直径50cmの円形でローム面より上にあり、焼土の厚さは10cm余で赤褐色に良く焼けていた。周囲に焼土の散布は無く、土坑状の堀り込みの中に入っていたらしい。焼土のすぐ近くから、中世陶器片（第7図14）が出土しており関連する遺物であろう。

新しい溝址はA・B区にある。A区の溝址は約3m調査したが、田の用水路である。現代の田の土手下には暗渠排水の掘り方が、それより南西側へ約2m離れた位置に平行して掘られている。深さは20cm余でU字形のきちんとした溝であり、現代の水田を造成する以前の用水路と思われる水田の造成時期は土地所有者の方も明確ではないが、江戸時代末期以後と推測され、この用水路は江戸時代に使用されていたものであろう。B区の溝址は表土下20cm位から白砂の入る溝で下部は表土下50cm位い迄であり、用地をやや斜に西から東へ横断していた。黒褐色土を切っているが掘り方は明確でなく自然溝址の可能性が強い。近在の古老の話では、相當に有名な白砂に入る溝らしく東方へ続いていると話てくれた。遺物の出土は無く、時期は不明であるが中世まで下がる可能性もある。

（佐々木嘉和）

IV まとめ

田井座遺跡では縄文時代前期初頭の竪穴住居址5件、弥生時代後期の竪穴住居址3軒と方形周溝墓2基等とともに多くの同時代の遺物が出土した。

まず、縄文時代前期初頭についてみると、該期の集落址に具体的な調査の手が入ったのは本遺跡がはじめてであり、南信地方における縄文集落の変遷等考える上で貴重な資料を提供したといえる。

早期後半から伊那市児塚遺跡1号住居址、上伊那郡飯島町カゴ田遺跡等屋内に炉をとり込んだ例が増加するが、本遺跡ではすでに地床炉が定形化している。また、上部構造についてみると押型文期の伊那市三ツ木遺跡では2軒とも一方に偏った6本の柱穴が掘り込まれており、片屋根的な構造が考えられる。早期後半になると上記2遺跡の柱配置は無柱、二本支柱あるいは三脚柱であり、さらに本遺跡の段階では6~8本程度の壁支柱と壁下に垂木尻を備えたものになっている。本遺跡で確認された上部構造は茅野市高風呂遺跡では早期末の段階で既に確立されている。また同遺跡の場合やはり壁際ではあるが4本柱穴が一般的で、平面形も方形をとるものが約半数を占める。このような相違は単なる2遺跡の差とみるべきではなかろう。先述の南信地方における上部構造の変遷は関東地方でもほぼ同様の様相を示し、しかも南信のそれよりも先行していることはすでに指摘されているところである。(宮本 1986)。

一方、ほぼ同期と考えられる5軒の竪穴住居址においては規模・平面形・上部構造・炉址等に強い類似性が指摘できるし、さらに竪穴住居址と柱穴群の配置から該期に縄文集落を特徴づける集落形態が確立していた可能性がある。

以上本遺跡を中心に概観した二様相を指摘したにとどめるが、集落景観を把握することができれば、地域の集落変遷に関する資料集積が進むとともに、縄文時代の集落研究に欠くべからざる基礎資料を提供することになろう。

弥生時代後期の遺構はA区に竪穴住居址、B区に方形周溝墓が分布する。竪穴住居址の分布密度は粗で散在しており、居住域と墓域とを区画する施設は確認できなかったものの、両者の占地には差があり明瞭に区別されていたと考えられる。

一方、同時期の遺構が主体を占める殿原遺跡では対照的にかなり密集した集落景観を呈し、また墓域は明確に分離されていない。

同時期に営まれた近接する二集落の示すこのような差異がいかなる過程で生じたかを追求し、またさらに詳細に集落の全容を把握することにより、下伊那地方の弥生時代後期集落の実体解明が進むといえよう。

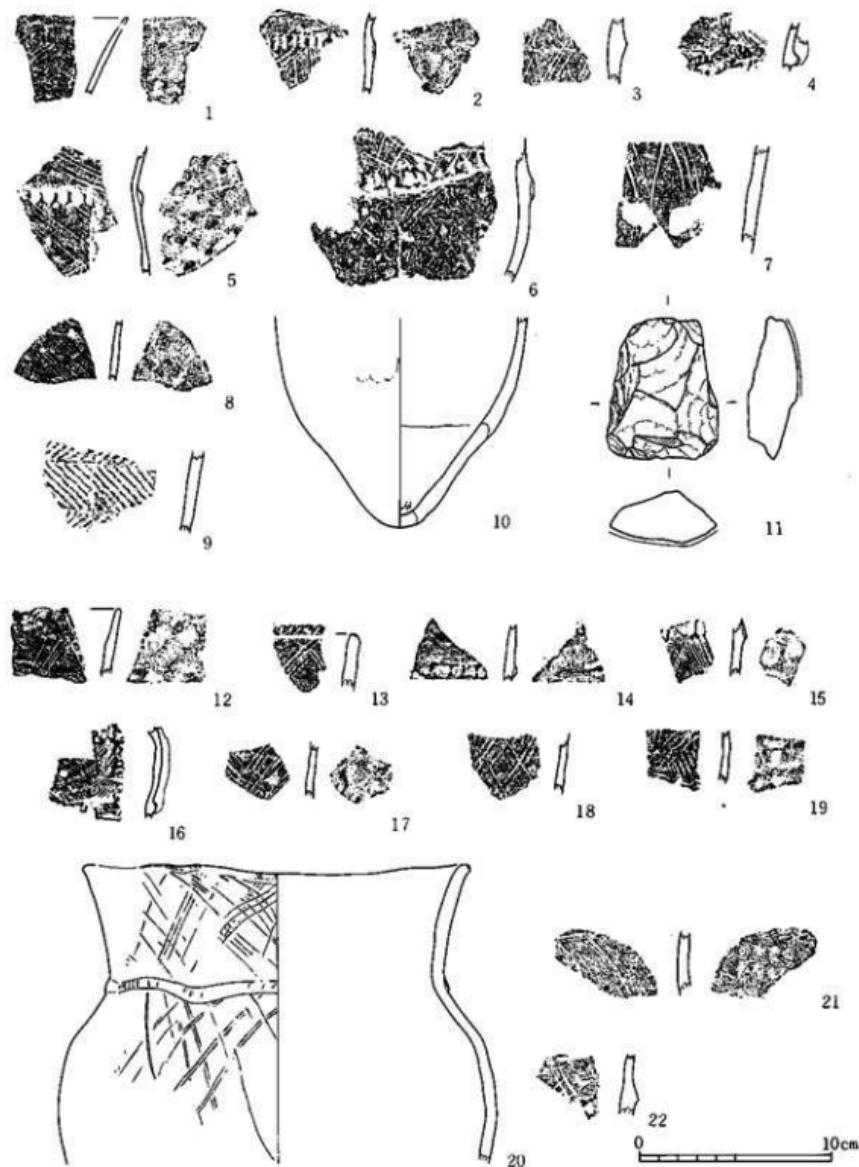
本発掘調査は調査範囲が都市計画道路の路線内ということもあり遺跡の全体像を把握することは困難であったが、以上指摘した諸点を含めて縄文時代前期と弥生時代後期の集落の全容が解明されれば、両期の集落研究を行なう上で欠くことのできない貴重な資料を提供するといえる。

(馬場保之)

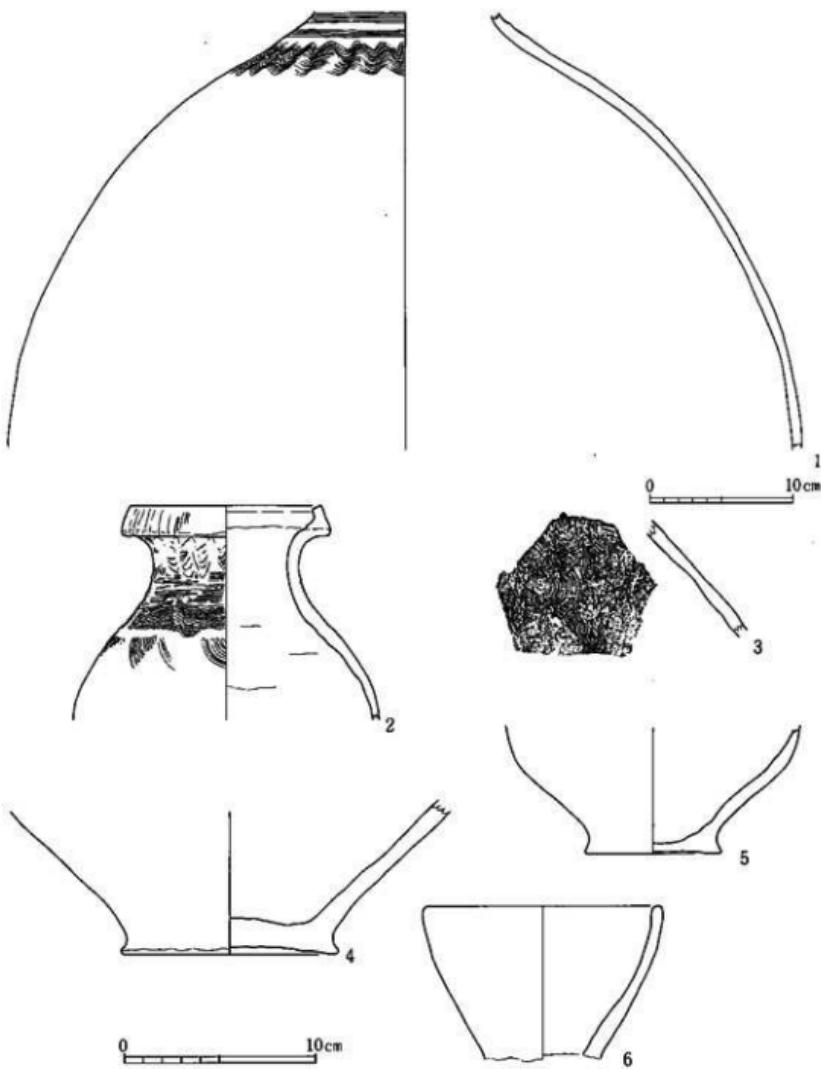
参考文献

- 伊那市教育委員会 1984 「伊那市史 歴史編」
建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所・飯田市教育委員会 1987 「殿原遺跡」
駒ヶ根市教育委員会 1971 「舟山遺跡緊急発掘調査報告—第Ⅰ次および第Ⅱ次調査」
同上 1972 「羽場下・舟山—緊急発掘調査報告」
高森町教育委員会 1977 「高速宮の原遺跡」
茅野市教育委員会 1986 「高風呂遺跡」
長野県史刊行会 1983 「長野県史 考古資料編」
宮本長二郎 1983 「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 『文化財論叢』 同朋社 P3~37

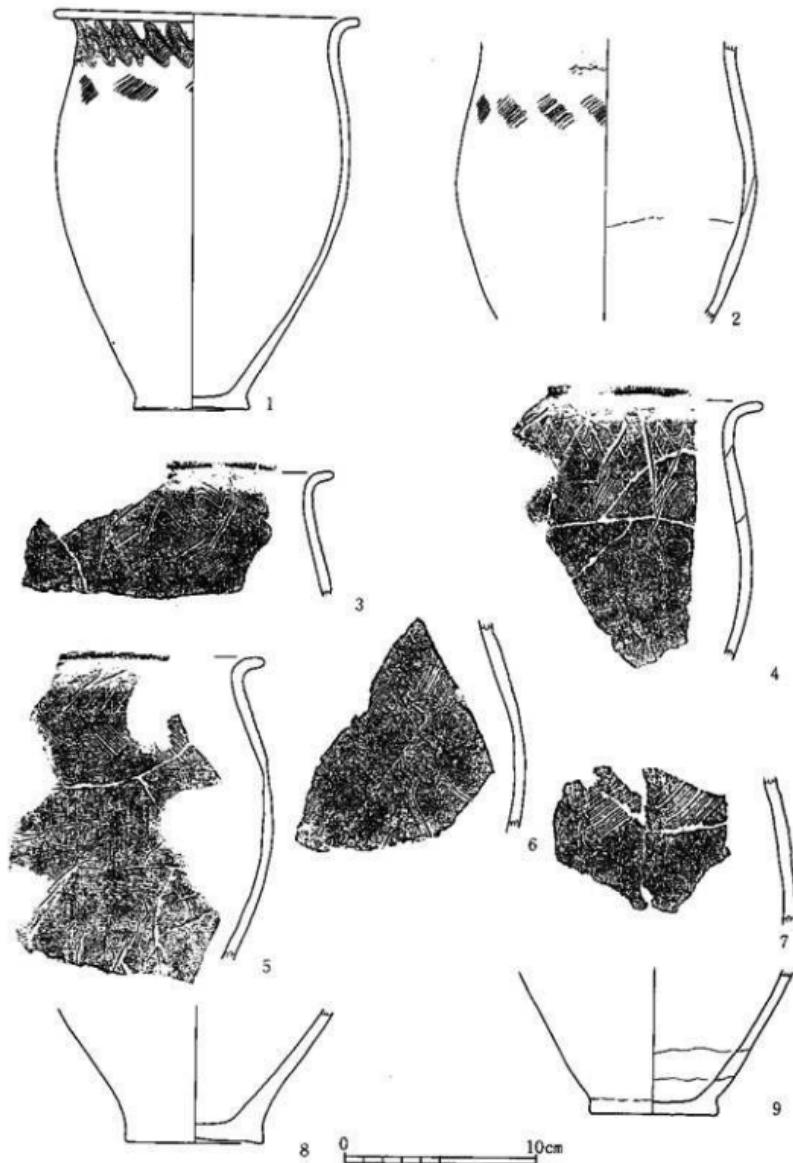
図 版



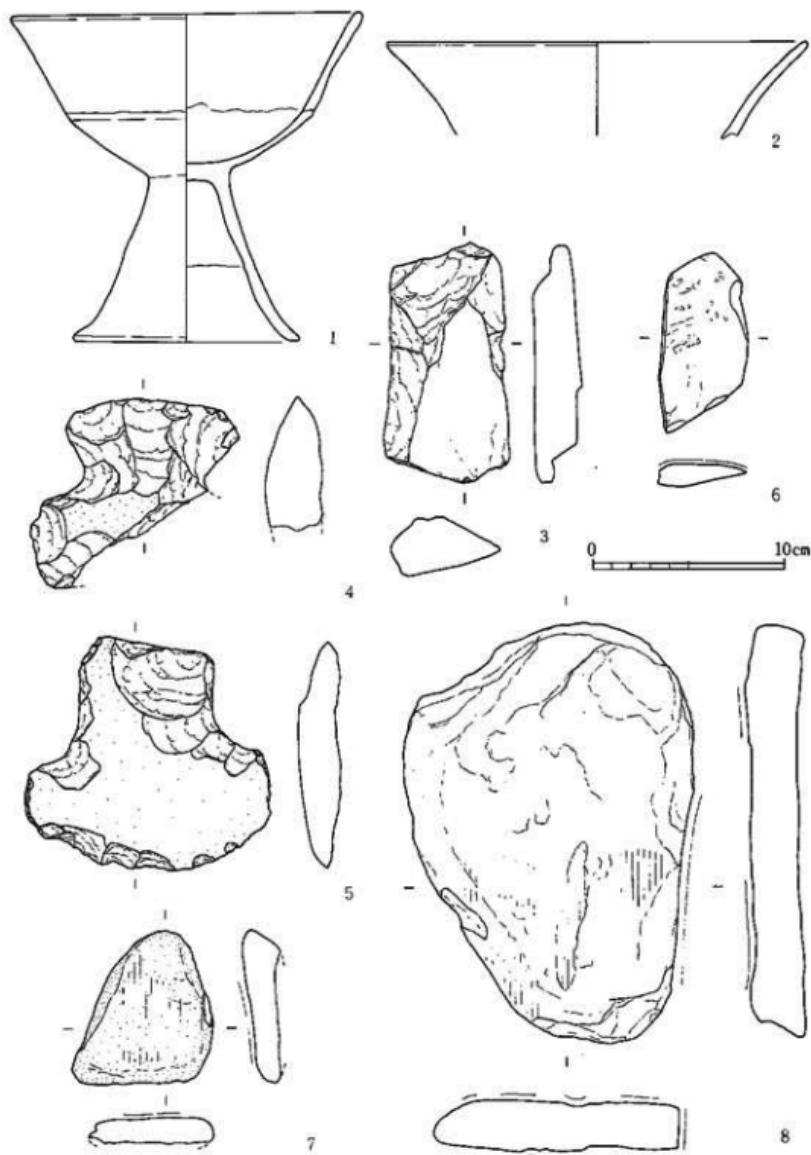
第1図 TIZ 4・5・7号住居址出土遺物(4住1-11, 5住12-19, 7住20-22)



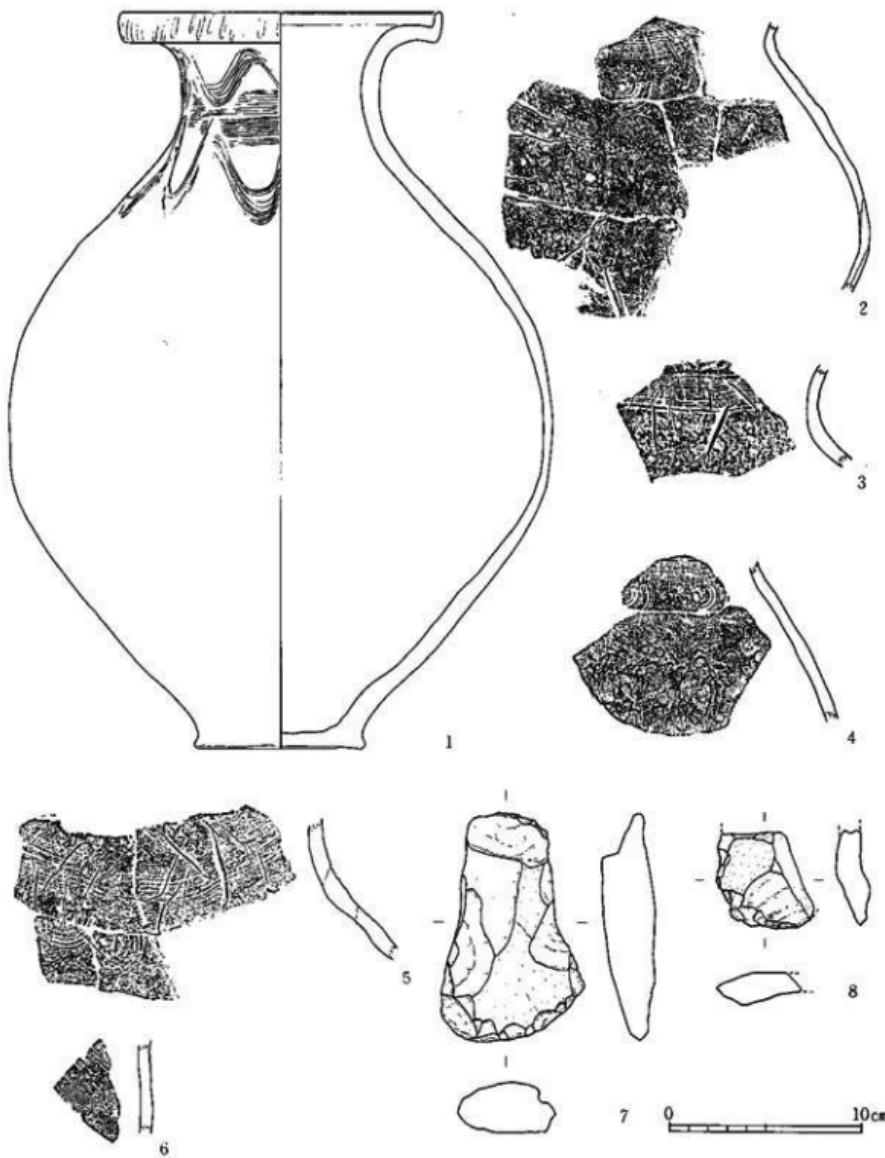
第2図 TIZ 1号住居址出土遺物



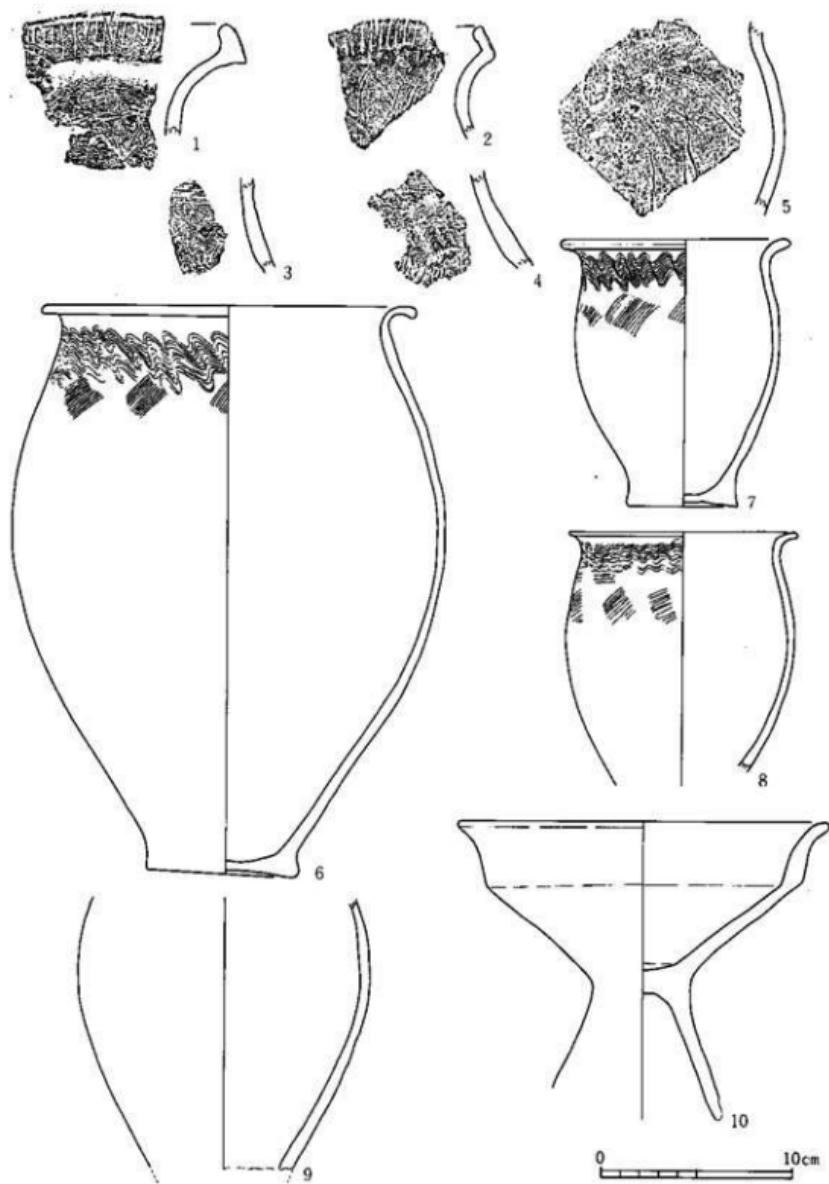
第3図 TIZ 1号住居址出土遺物



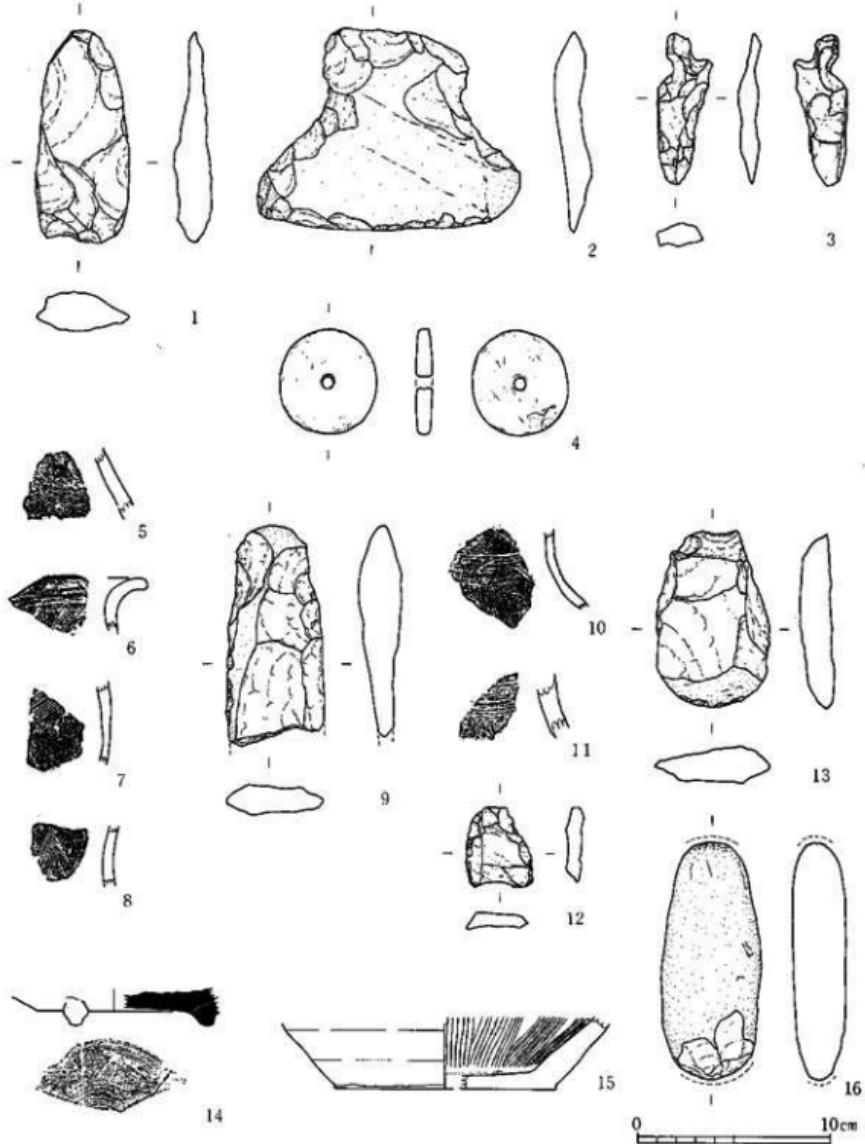
第4図 TIZ 1号住居址出土遺物



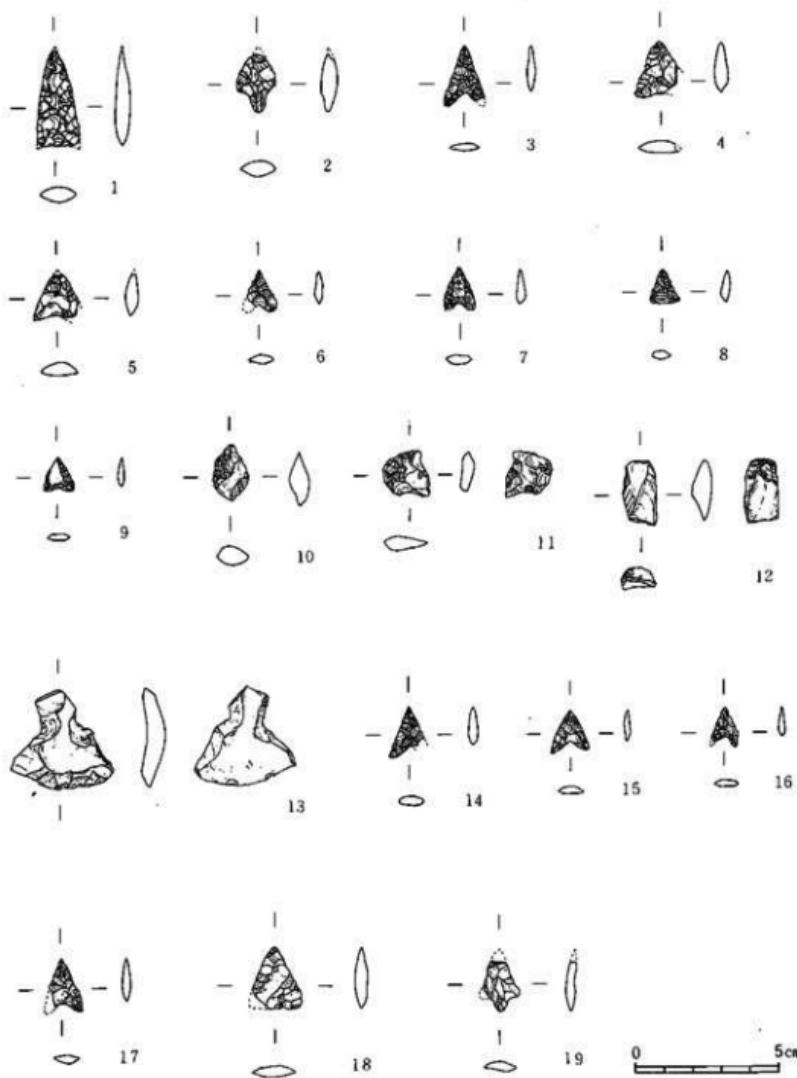
第5図 TIZ 2号住居址出土遺物



第6図 TIZ 3号住居址出土遺物



第7図 TIZ 3号住居址、方形周溝墓1・2、焼土、遺構外出土遺物
(3住1~4、方周1 5~9、方周2 10~13、焼土14、遺構外15~16)



第8図 TIZ 4・5・8・3号住居址、土坑1出土石器
(4住1~12, 5住13~16, 8住17, 3住18, 土坑1 19)

図版 1



田井座遺跡近景（北から）



田井座遺跡近景（南から）

図版 2



A区遺構分布状況



B区遺構分布状況

図版 3



4号住居址



4号住居址炉

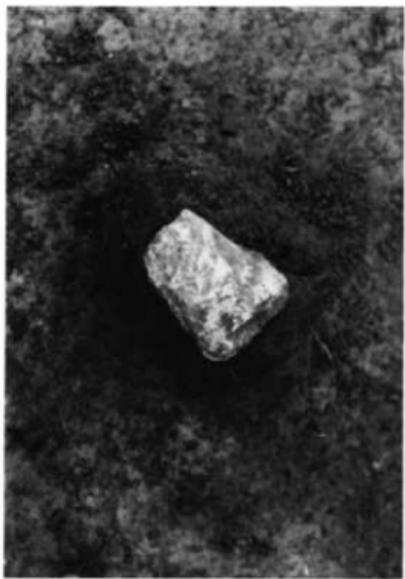
図版 4



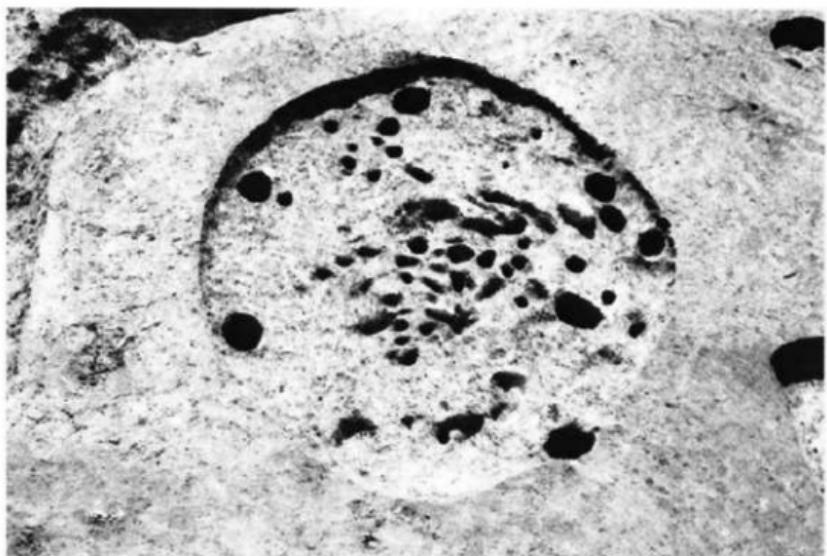
4号住居址断面



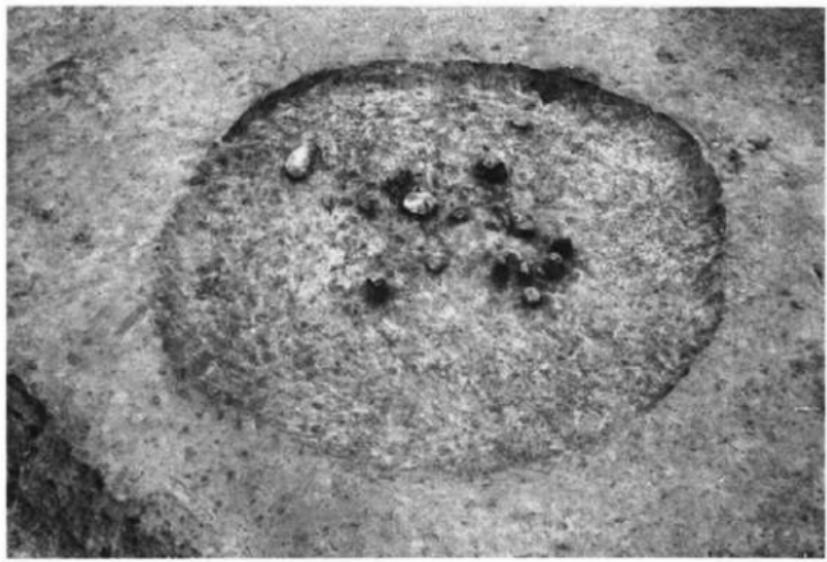
4号住居址遺物出土状況



図版 5

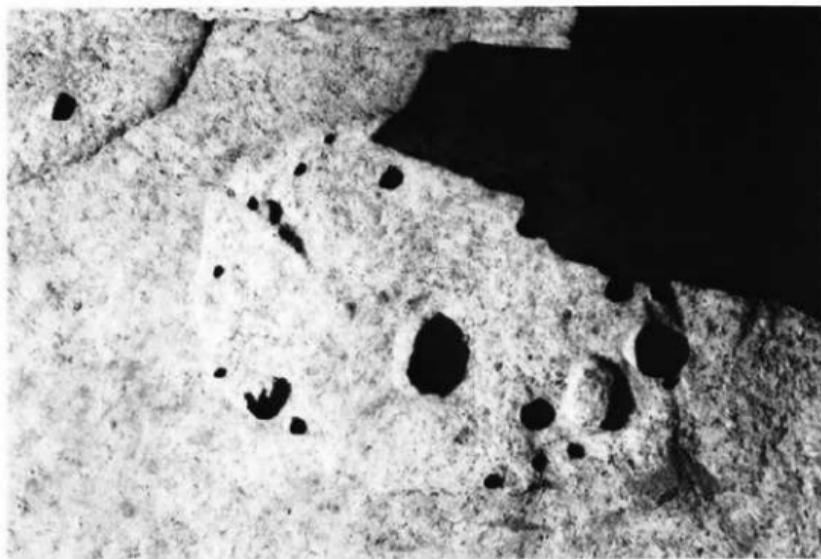


5号住居址



5号住居址遺物出土状況

図版 6



6号住居址



7号住居址

図版 7



7号住居址遺物出土状況



8号住居址

図版 8



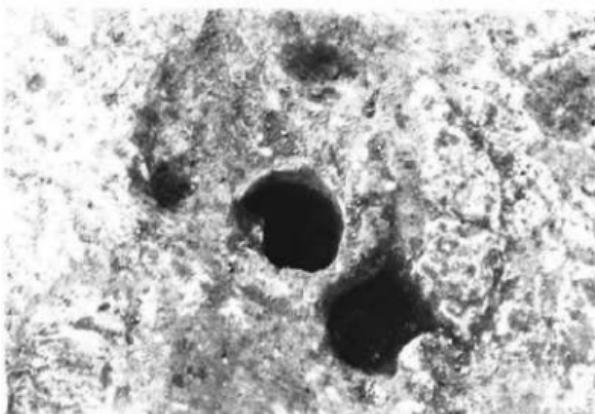
1号住居址



1号住居址遺物・炭化材出土状況

図版 9

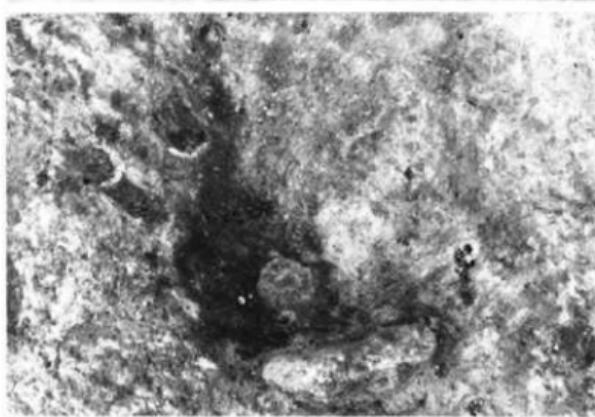
1号住居址 炉 1 (土器埋設炉)



炉 1 断面



炉 2 (地床炉)

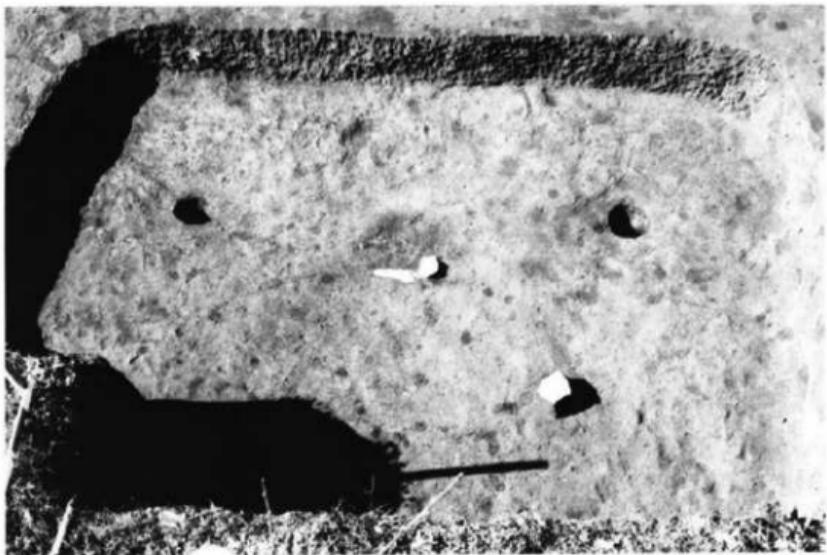


図版 10

1号住居址遺物出土状況



図版 11



2号住居址



2号住居址遺物出土状況

図版 12



2号住居址炉



2号住居址炉断面

図版 13



図版 14



方形周溝墓 1

(東から)



方形周溝墓 1

主体部 1
(西から)

図版 15



方形周溝墓 1 主体部 2 (西から)



方形周溝墓 2 (西から)

図版 16



土坑 1



土坑 1 断面



A区柱穴群



A区柱穴群

図版 18



A区柱穴群



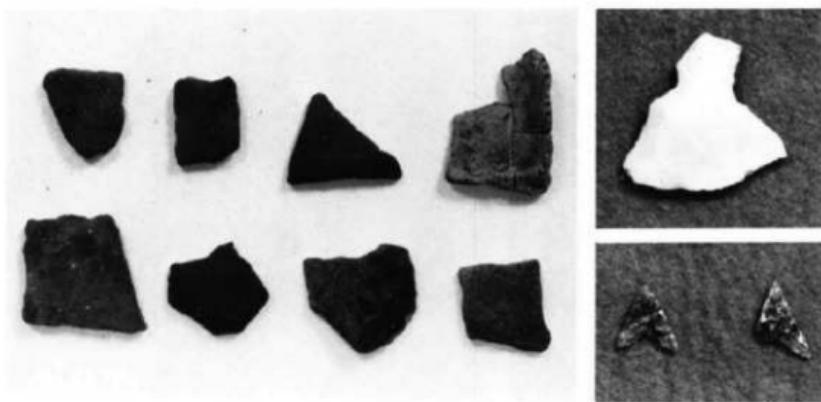
B区柱穴群

図版 19



4号住居址出土遺物

図版 20

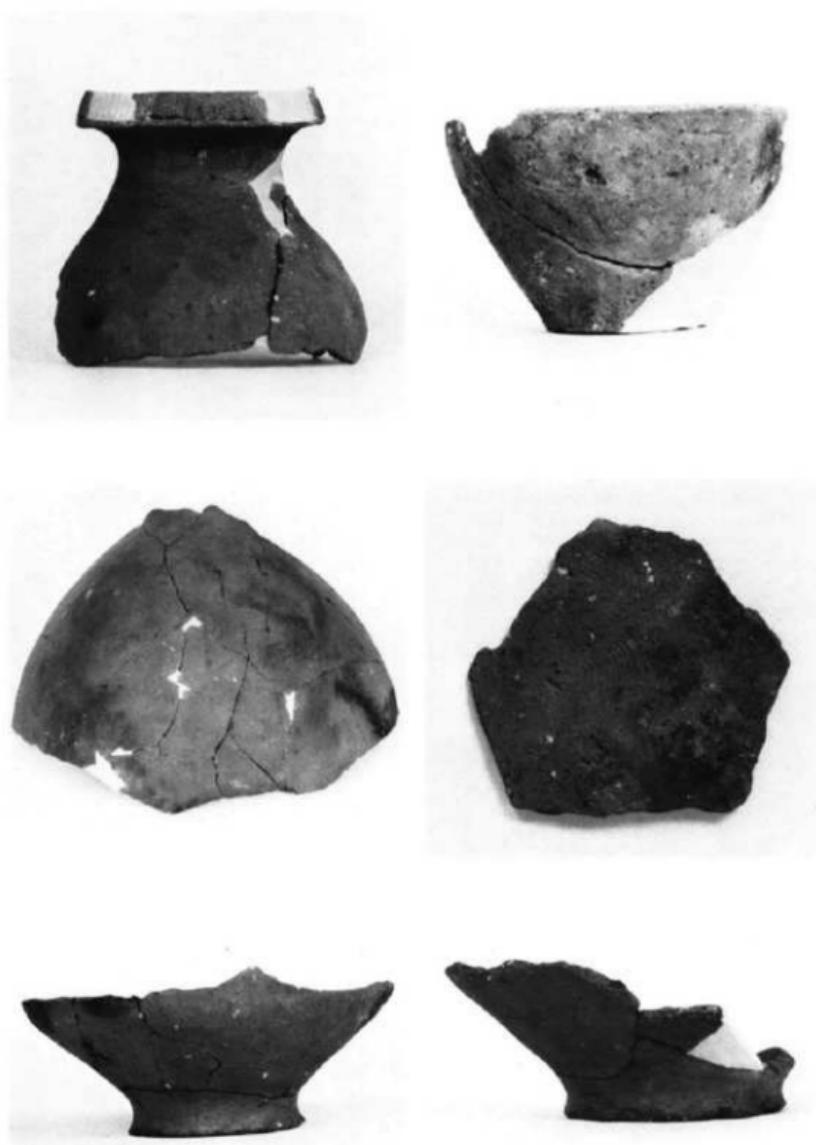


5号住居址出土遺物



7号住居址出土遺物

図版 21



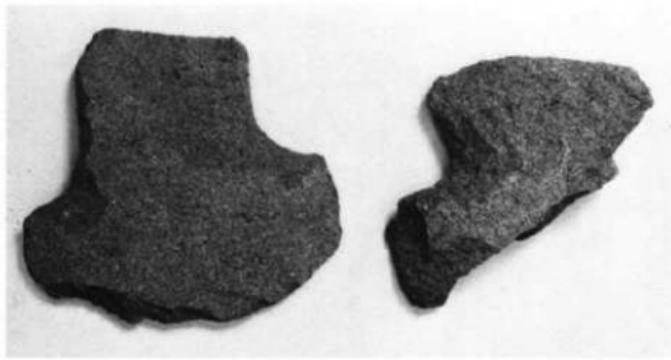
1号住居址出土遺物

図版 22



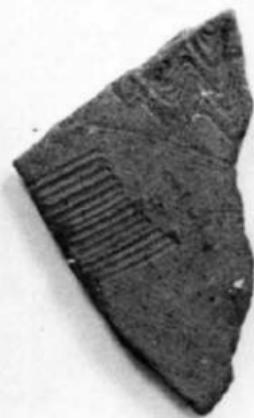
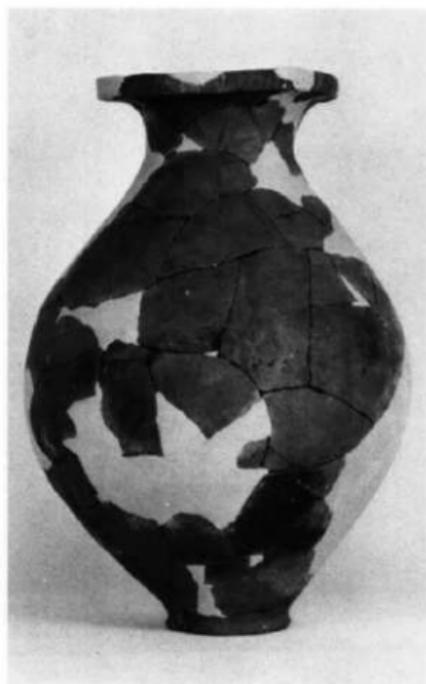
1号住居址出土遺物

図版 23



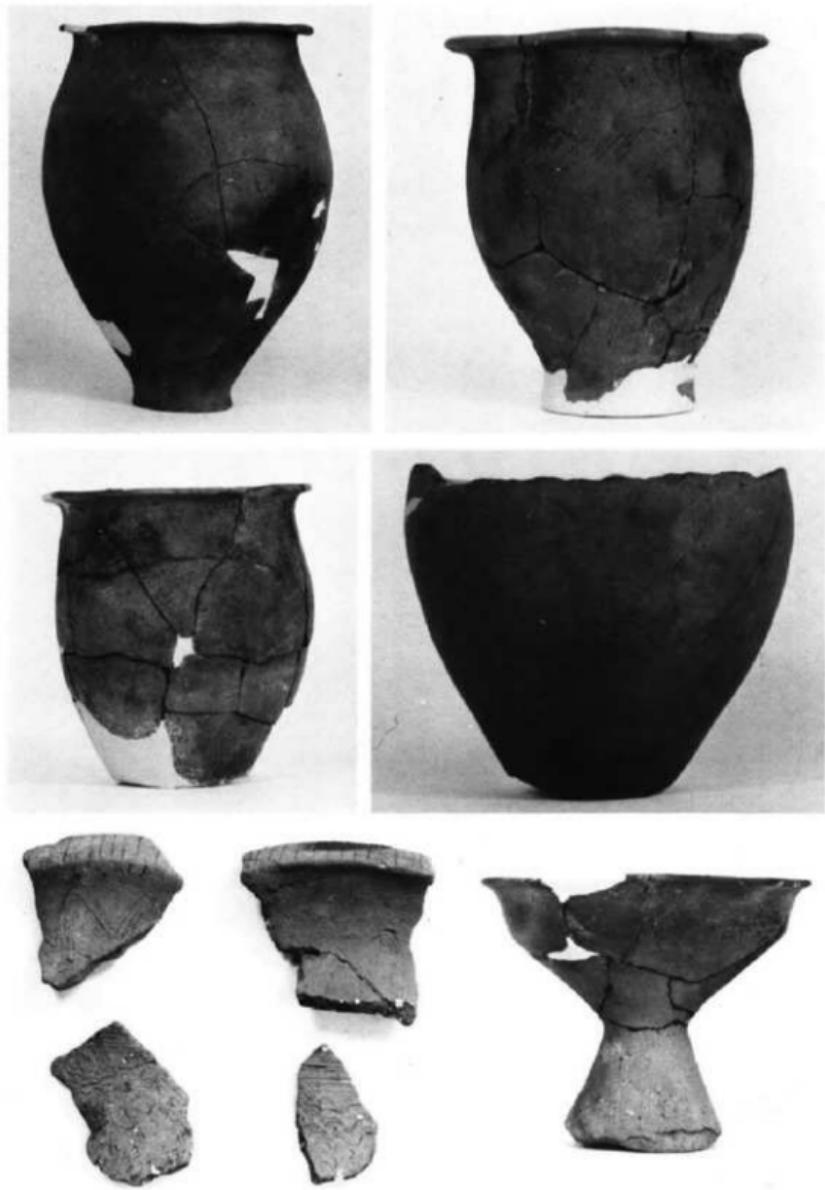
1号住居址出土遺物

図版 24



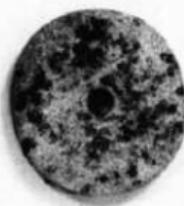
2号住居址出土遺物

図版 25



3号住居址出土遺物

図版 26



3号住居址出土遺物

方形周溝墓1出土遺物



圖版 27



方形周溝墓 2 出土遺物



A
區燒土遺構出土遺物



遺構外出土遺物

図版 28



調査風景



調査風景



調査風景



調査風景

都市計画道路知久町中村線建設に係る
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

田 井 座 遺 跡

発 行 日 昭和63年3月31日

編集・発行 飯田市教育委員会

長野県飯田市大久保町2534番地

印 刷 (有) 飯田プリント
